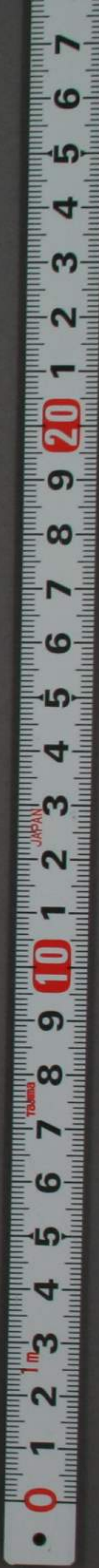


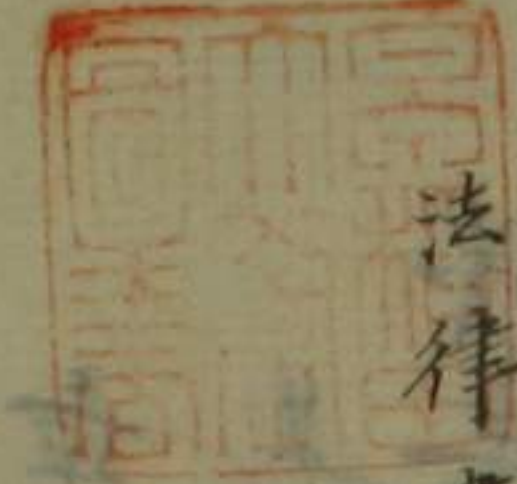
佛蘭西
法律書
洛眾法

552
一



6552
1

佛蘭西
法律書
沼澤法一



前加規則〇(千八百八年第十一月十七日
決定同月廿七日布告)

刑事之訴

第一條〇犯人ヲ刑ニ處セント求ムル訴
即チ刑

ハ法律上ニテ別段任ラ受ケタル官吏ニ依テ

レハ之ヲ為ス可カラス

重罪輕罪註語ハ此等罪名ノ差別ヲ為メ損害ヲ

受ケタル債ヲ得ント求ムル訴即チ訴ハ何人

民事之訴

鶴田乙五

に罰ス可キ重罪ヲ犯セシハ其罪ヲ
仏蘭西ノ裁判所ニ訴ヘ之ヲ裁判スルコトヲ得
可シ

仏蘭西領地外ニテ仏蘭西ノ法律ニ循ヒ輕罪
ナリト定メタル罪ヲ犯セシハ其罪
罪ノ地ノ法律ニ於テモ亦之ヲ犯罪ナリト為
シ罰ス可キ時其罪ヲ仏蘭西ノ裁判所ニ訴ヘ
之ヲ裁判スルコトヲ得可シ

然レハ重罪輕罪ノ向ハス犯人既ニ外國ニテ
確定ノ裁判言渡ヲ受ケタル証ヲ立ル時ハ仏



蘭西ノ裁判所ニ更ニ其罪ヲ訴フ可カラズ
仏蘭西人外國ニ於テ仏蘭西人又ハ外國人ニ
對シ輕罪ヲ犯シタル時ハコトニテトルビエ
リヨヨリ其罪ヲ仏蘭西ノ裁判所ニ訴ヘ出ス
可シ但シ其訴ヲ為ス前ニ損害ヲ受ケシ本人
ヨリ其犯罪ノ旨ヲ申立テ又ハ其罪ヲ犯シタ
ル地ノ官吏ヨリ仏蘭西ノ官吏ニ公務ヲ以テ
其犯罪ノ旨ヲ申越ス可シ
第七條ニ記スル重罪ヲ犯シタル時ノ外ハ犯
人仏蘭西ニ歸リ来ラザルニ其罪ヲ訴フ可

カラス^ハカ^ハ西^ノ裁判所^ニ於^テ

第六條〇(千八百六十六年第六月廿七)日左ノ如

ク改ム刑事ノ訴ハ犯人住所ノヨリニスル

ビュブリック又ハ犯人在ル所ノヨリニスル

ビュブリックヨリ之ヲ為ス可シ

然レモ^ハ覆^シ審^ス院^ニハ^ハミ^ニス^テール^ルビュブリック^ヲ求

メニ^ハ目^ノ人^ハ又^ハ本人等ノ求メニ^ハ目^ノ人^ハ其重罪又

ハ輕罪ヲ犯シタル地ト更ニ接近シタル裁判

所ニ其訴ヲ移サシムルヲ得可シ

第七條〇(千八百六十六年第六月廿七日)左ノ如

ク改ム(仏蘭西領地外ニテ)國ノ安寧ヲ害スル

重罪又ハ國璽或ハ通用貨幣及ヒ紙幣或ハ裁

許アル^ハバ^ニシ^クノ手形ヲ贋造スル罪ヲ犯セ

外国人ハ主役ノ別ナク之ヲ仏蘭西ニテ

一タル時又ハ仏蘭西政府外國政府ヨリ進卒

渡ヲ得タル時仏蘭西ノ法律ニ循ヒ其罪裁

一之ヲ裁判スルヲ得可シ

田野ノ監守人及ヒ森林ノ監守人

邏卒長

メイル止邑及ヒ其輔佐

アロキユリユールアムニリアルル及ヒ專代役

治安裁判役即ケ民事タル者刑事ニテ

備警兵ノ士官

邏卒總長

下吟味掛ノ裁判役

第十條〇「プレー」州及ヒ巴里府ノ警察總督

ハ弟八條ニ猶ヒ自カラ輕重ノ罪犯及ヒ誣誤

ヲ探索シテ其証ヲ取り犯人ヲ官轄ノ刑法裁

判所ニ引渡ス可キ處置ヲ為シ又ハ司法警察

官吏ニ此等ノ事ヲ求ムルヲ得可シ

弟十一條〇邏卒長又其在ラサルコトニ

於テハメイル止若シ又メイル止ノ在ラサル時ハ

其輔佐總テ誣誤ノ罪ヲ探索シ又田野ノ監守

人及ヒ森林ノ監守人ノ別殿任ヲ受ケタル者

件ニ付テモ亦註誤ノ眾ヲ探索ス可キ但シ其
事件ニ付テハ田野又ハ森林ノ監守人ト同シ
ク其探索ヲ為シ若シ其權互ニ相觸ル、時ハ
邏卒長、ヨイル並ニ其輔佐其探索ヲ為ス可シ
邏卒長、ヨイル並ニ其輔佐ハ註誤ノ眾ニ付キ
損害ヲ受ケシ本人ヨリノ申立、又ハ他人ヨリ
ノ申立ヲ聽ク可シ
此等ノ官吏ハ註誤ノ種類、及シ模様、並ニ之ヲ
行ヒシ場所、及シ日時ト、犯罪ノ証拠ト以テ調書
ニ記ス可シ

〇、第十二條 〇一箇ノゴムエトニシテ數區ニ分テテ
ル時ト雖モ邏卒長ハ其ゴムエトニ内何レノ
地ヲ向ハス其職務ヲ行フ可シ但シ註誤ノ眾
ヲ犯シタルト自己ノ持場タル區内ニ非ルヲロ
実ト為シ他ノ區ニテ犯シタル註誤ノ探索ニ
管セスト述フ可カラス
ゴムエトニシテ區分ハ邏卒長ノ權ヲ限ル境界
ヲ定ムルニ非ス唯平常其職ヲ行フニ付キ其
持場ヲ別段定ムル為メトリス
第十三條 〇一區ノ邏卒長ニ正者ノ差支アル時

ハ病氣等隣區ノ邏卒長之ニ代ル可シ但シ隣區ノ邏卒長ハ其持場差支アル邏卒長ノ持場ニ最近ナラサルヲ口實ト為シ又ハ其差支ノ正當ナラス或ハ其証拠ナキヲ口實ト為シ其求メヲ受ケシ職務ヲ遲延ス可カラズ

第十四條 ○邏卒長一負ノミナルコトモエトシテ於テ其邏卒長ニ正當ノ差支アル時ハ其差支ノアル時間ヲマイル之ニ代ル可シ若シ又マイルニアラルサル時ハ其輔佐之ニ代ル可シ
第十五條 ○「マイル」及ヒ其輔佐ハ、誣誤罪裁判所

即チ民事ニ付テハノ「ミ」ニステールニ「ブリ」シ治安裁判役ナリテハ三日内ニ證書類ヲ罪人ニ付即チ邏卒長ニ送クトモ三日内ニ證書類ヲ罪人ニ付並ニ罪犯ニ付テノ換様書ヲ差送ル可シ但シ其犯罪アリシコトヲ知リタル日ヲ其三日ノ期限内ニ算入ス可シ
第三章 ○田野ノ監守人及ヒ森林ノ監守人ノ事

第十六條 ○田野ノ監守人及ヒ森林ノ監守人司法警察ノ職務ヲ行フニ付テハ各其持場内ニ田野或ハ森林ニ害ヲ為ス輕罪及ヒ誣誤

探索ス可シ

田野又ハ森林ノ監守人ハ輕罪又ハ誑語ノ罪
ヲ犯シタル模様並ニ其場所及ヒ日時ト其証
拠トヲ調書ニ記ス可シ

若シ犯人物件ヲ他所ニ移シタル時ハ此等ノ
監守人等ヲ移シタル地ニ到リテ其物件ヲ取
上ク可シ然レバ此等ノ監守人ハ治安裁判役
或ハ其補役又ハ邏卒長又ハノイニ或ハ其輔
佐ノ立會ニ非カレハ家屋製造所並ニ之ニ接
シタル庭園及ヒ園地ニ入ルヲ許サズ但シ

此場合ニ於テ田野又ハ森林ノ監守人ノ記ス
ル調書ハ其立會人ニ姓名ヲ手署ス可シ

又田野ノ監守人及ヒ森林ノ監守人ハ禁錮以
上ノ刑ニ處セラル可キ罪ヲ現ニ犯シ居タル
者又ハ衆人ニ犯罪ヲ高聲ニ呼ビ追慕ル者
ヲ召捕メテ治安裁判役又ハノイニ此ノ面前ニ

連行カ可シ

其監守人ハ其召捕ヲ為人ノメテ止又ハ其輔佐
ニ申立テテ公ケテ兵力即チ邏卒常備兵備警兵
ヲ除キ論ス於テ備ルヲ

監守人等ヲ云フ但シ此場合ニ於テ備ルヲ

得可シ、但レ、イル又ハ其輔佐ハ其求メテ肯
セサルヲ得ス、

○第十七條○田野ノ監守人及ヒ森林ノ監守人司
法警察ノ職務ヲ行フニ付テハ、アプロキニール
アムヘリアルノ支配ヲ受ク可シ、但レ行政警
察ノ職務ヲ行フニ付テハ、各々其行政長官ノ支
配ヲ受ク可シ、

第十八條○官ニ属スル森林、コムニオンニ属ス
ル森林公ケノ建造物ニ属スル森林ノ監守人
ハ、第十五條ニ定メタル期限内ニ其調書ヲ森

林其支配人又ハ森林ノ監察人又ハ監察人
補役ヲ送ル可キ、イル又ハ其調書直正ナリトハ

其森林ノ監守人又ハ其調書直正ナリトハ
誓ヲ為サシメ、イル又ハ其調書直正ナリトハ
日内ニ其旨ヲアプロキニール
報告スル可キ、

第十九條○森林ノ支配人又ハ其監察人又ハ其
補役ハ、犯人又ハ犯人ヲ為ル責任在リ、イル又ハ其
又輕罪裁判所ヲ呼出申出ル可キ、

第二十條○田野ノ監守人其調書又ハ私有ノ森

林ノ監守人ノ調書ハ註誤ノ罪ニ管シタル時
ハ才十五條ニ記スル期限内ニ治安裁判役所
在ノ「コムエト」ノ選卒長ニ差出シ又選卒長
アラサル時ハ其「コムエト」ノ「ノイル」ニ差出
シ又其調書輕罪ニ管シタル時ハ「プロキユリコ
ル」アムペリアムニ差出ス可シ

第二十一條ノ前條ニ記シタル調書註誤ノ罪ニ
管シタル時ハ治安裁判役所在ノ「コムエト」
ノ選卒長又選卒長ノアラサル時ハ「ノイル」又
ハ其輔佐第二篇才一章ニ記シタル如

第二ク處置ス可シ
才百三十七條見合

第四章ノ「プロキユリエトル」アムペリアム
ノ事及ヒ其代役ノ事
第一款ノ司法警察ニ付キ「プロキユリコ
ル」

第二十二條ノ「プロキユリエトル」アムペ
リアムノ權限

罪裁判所又ハ重罪裁判所ニテ吟味ス可キ總
テハ罪犯ヲ探索シテ之ヲ訴フ可シ

第二十三條ノ犯罪ノ地ノ「プロキユリエトル」
アムペリアム又ハ犯人住所ノ「プロキユリエトル」
アムペ

リアル又ハ犯人ノ在ル地ノ「プロキユリエトル」ムペリアルハ前条ニ記スル所ノ職務ヲ行フ
ヲ得可シ

第二十四條〇才五條才六條才七條ニ記シタル
如ク、仙蘭西領地外ニテ重罪又ハ輕罪ヲ犯シ
タル時、其犯人住所ノ「プロキユリエトル」ムペ
リアル又ハ其在ル地ノ「プロキユリエトル」ムペ
リアル又ハ其最終ノ住所ノ「プロキユリエトル」ム
ムペリアル才二十二條ニ記シタル職務ヲ行
フ可シ

第二十五條〇「プロキユリエトル」ムペリアル又ハ
其其他司法警察ノ權アル官吏ハ其職務ヲ行フ
得可シ、直ニ公人兵カテ借シテ求ムルコトヲ
第二十六條〇若シ「プロキユリエトル」ムペリアル
第三差支アリ時、其代役之ヲ代ル可シ、若シ又
其代役教人アル時ハ最モ先キニ任ラ受ケタ
ル者之ヲ代ル可シ、〇若シ又代役スルヤル時
ニ裁判所ノ上席人ヨリ別段在任ニ於テ裁判役
之ヲ代ル可シ

第二十七條○プロキユールアマペリアルノ犯罪ヲ知リタル時直ニ其旨ヲ上等裁判所ノプロキユールニゼ子ラルニ報告シ警察ノ事務ヲ取行フニ付キ其令ニ循フ可シ

第二十八條○「プロキユールアマペリアルハ才六章以下見合ニ記スル所ノ規則ニ循ヒ下吟味掛リ裁判役ノ渡シタル言渡書ヲ送達シ及ヒ之ヲ執行フノ手續ヲ為ス可シ」
其ノ内第二款○「プロキユールアマペリアル」
第二十九條其職務ヲ行フニ付キ慶置ヲ為ス可シ

其ノ外ノ法

第二十九條○何人ニ限ラス總テ官吏其職務ヲ行フニ當リ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル者アルヲ知リタル時ハ其犯罪ノ地ヲ管轄スル裁判所ノプロキユールアマペリアル又ハ犯人時ノ在ル地ヲ管轄スル裁判所ノプロキユールアマペリアルニ即時其旨ヲ報告シ且之ニ管シタル書類調書証書等ヲ其プロキユールアマペリアルニ送ル可シ
第三十條○何人ニ限ラス國人安寧ヲ害シ又ハ

人命或ハ所有物ヲ害スル罪犯ヲ日較手シタル者ハ其犯罪ノ地ノ「プロキユール」アムペリアル又ハ犯人ノ在ル地ノ「プロキユール」アムペリアルニ即時ニ之ヲ報告ス可シ

第三十一條〇犯罪ノ申立書ハ其申立人自カラ之ヲ記シ又ハ其名代人之ヲ記シ又ハ「プロキユール」アムペリアル本人ノ求メニ因リ之ヲ記ス可シ但シ其中立書ハ毎葉「プロキユール」アムペリアル姓名ヲ手署シ並ニ申立人或ハ其名代人之ニ姓名ヲ手署ス可シ

若シ其申立人或ハ其名代人姓名ヲ手署スルニ知ラズ又ハ手署スルニ欲セザル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
名代人ヲ立ル証書ハ申立書ニ添ヘ置ク可シ若シ申立人其申立書ハ寫ヲ得ント欲スル時ハ稅銀ヲ出シ之ヲ受取ルヲ得可シ
第三十二條〇若シ施体又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キ罪重罪ヲ現ニ行ハタル時ハ「プロキユール」アムペリアルニ即時ニ其場ニ至リ犯罪ニ管レタル物件並ニ其模様及ヒ其場ノ模様ノ証ヲ

立ル為ノ必要ナル調書ヲ記シ且其場ニ在ル人又ハ犯罪ノ模様ヲ知リタル人ノ申述ヲ聴ク可シ

「プロキユリユートルアムペリアルハ其犯罪ノ場ニ至ルシ旨ヲ下吟味掛リ裁判役ニ報告ス可シ但シ此章ニ記スル如ク相当ノ處置ヲ為スニ付キ其裁判役ノ来ルヲ待ツニ及ハス第七條見合

第三十三條「プロキユリユートルアムペリアルハ前條ノ場合ニ於テ調書ヲ記スルニ付キ犯罪人

ハ為ノ害ヲ受ケタル者ノ親族近隣ノ者僕婢ヲ呼寄セ其申述ヲ聴ク可シ但シ其申述書及前條ノ申述書ニハ其申述ヲ為ス者姓名ヲ手署ス可ク又其手署スルニ付テ肯セサル時其旨ヲ附記ス可シ

第三十四條「プロキユリユートルアムペリアルハ其調書ヲ記シ終ルニ至ル迄如何ナル人ト魚氏犯罪アリル家ヲ出ルニ付テ禁山及他所ニ到ルニ付テ禁スルヲ得可シ若シ此禁制ニ背ク者ナル時之ヲ召捕ヘテ

輕罪裁判所附獄舎ニ繫ク可シ但シ其禁制
ヲ犯シタルニ付テハ刑ハ其犯人ニ下吟味裁
判役ノ面前ニ呼出シテ其申述ヲ聽キ「プロキエ
リユール」アンパリアルノ求刑ノ上其裁判役之
ヲ言渡ス可シ又其犯人出席セサル時ハ出席
セザル俟ニテ其刑ヲ言渡ス可シ○此言渡ヲ
為スニ付テハ別ニ法式ヲ用フルトナク又猶
豫ヲ許ルズトナク且其言渡ニ付キ故障ヲ申
述セ又ハ之ヲ控訴スルトテ訴サズ申上ル
其刑ハ十日間ノ禁錮ト百員ヲ罰金ト

第三十五條

○「プロキユトル」アムベリアルハ重
罪又ハ輕罪ヲ行フニ用ヒ又ハ其用ニ備ヘタ
ル可シト思フ所ノ兵器及ヒ其他ノ物件並ニ
其罪犯ニ目リ得タル可シト思フ所ノ物件ヲ
取上ケ且事實ヲ分明ナラシムルニ用立ツ可
キ物件ヲ取上ケ此等ノ物件ヲ犯人ニ示シテ
其辯解ヲ為サシメ此等ノ諸事ヲ調書ニ記シ
テ犯人ニ姓名ヲ手署セシム可シ若シ犯人手
署スルコトヲ肯セサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第三十六條○若シ重罪又ハ輕罪ノ模様ニ目リノ
犯人ノ所持スル書類及ヒ物件ヲ以テ罪犯ノ
証ヲ得可シト思フ時ハ「ゴロキユールアンペ
リアル」即時ニ犯人ノ住所ニ到リ事實ヲ分明
ナラシムルニ有益ナリト思フ物件ヲ穿鑿ス
可シ

第三十七條○犯人ノ住所ニ其犯罪ノ証トナリ
又ハ無罪ノ証トナル可キ書類又ハ物件アル
時ハ「ゴロキユールアンペリアル」之ヲ調書ニ
記シテ其書類又ハ物件ヲ取上ク可シ

第三十八條○「ゴロキユールアンペリアル」其
取上ケタル書類又ハ物件ヲ封シテ之ニ印ヲ
押ス可シ若シ其物件封印ヲ為スヲ能ハサル
時ハ之ヲ鉢又ハ袋ノ中ニ入レ其上ニ紙帶ヲ
附ケテ之ニ封印ヲ為ス可シ

第三十九條○前數條ニ記シタル處置ハ犯人ヲ
召捕セタル時ハ其面前ニテ之ヲ為ス可シ若
シ犯人之ニ立會フコトヲ欲セス又ハ立會フコ
ト得サル時ハ其名代人ノ面前ニテ之ヲ為ス
可シ○「ゴロキユールアンペリアル」ノ取上ケ

タル物件ハ犯人ニ示シテ之ヲ認メシメ其物
件姓名ノ字署ニ代用スル横線ヲ畫シ得可キ
モノタル時ハ之ヲ畫サシム可シ然レシ犯人
之ヲ肯セサル時ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第四十條○施体又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キ罪ヲ
現ニ行フタル時犯人ニ罪ノ重キ微憑アリテ
且其犯人其場ニアルニ於テハアゴキルル
アムベリア止之ヲ召捕ヘシム可シ
若シ犯人其場ニアラサル時ハアゴキルル
アムベリア止之ヲ引出サシムル為メ引出状

ヲ出ス可シ第九十一條
犯罪ノ申立アルノミニテハ住所アル犯人ニ
對シテ其引出状ヲ出スニ足ル可キ証アリト
セス
アゴキルルアムベリア止ハ犯人ヲ引出シ
次第即時ニ之ヲ問糾ス可シ此等ノ諸事ハ通
判役ノ為ス可キ所ナレトモ現行ノ罪犯ノ時
得可シ
第四十一條○現ニ行フ所ノ罪犯ト云フ即今行
タル罪犯ヲ現行ノ罪犯ト云フ

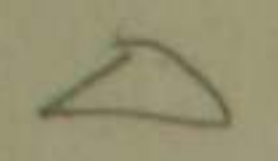
○又殺人ニ罪犯ヲ高聲ニ呼ヒ追ハル、時又ハ
被告人犯罪ノ時ヨリ間モナク兵器器具書類
物件等ヲ携ヘタルニ因リ之ヲ其罪犯ノ主又
ハ後ナリト思料ス可キ時ハ亦現行ノ罪犯ナ
リトス

第四十二條○前數條ニ循ヒテアロキリユールアム
ベリアルノ記ス可キ調書ハ其犯罪ノ地ノコ
ムシユールニノ邏卒長又ハノイヒ又ハ其輔佐又
ハ其コムシユールニ内ニ住スル者二人ノ面前ニ
テ之ヲ記シ且此等ノ者其調書ニ姓名ヲ予署

ス可シ
然レモ「アロキリユールアムベリアル」即時ニ立
會人ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人ナクシテ
調書ヲ記スルヲ得可シ
アロキリユールアムベリアル及ヒ立會人ハ調
書ノ每葉ニ姓名ヲ予署ス可シ若シ立會人姓
名ヲ予署スルヲ肯セス又ハ予署スルヲ
得サル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
第四十三條○「アロキリユールアムベリアル」ハ已
ムヲ得サル時ハ藝術職業ニ因リ罪犯ノ種

類ト模様トテ鑑定シ得可キ者一人又ハ二人
ヲ同伴伴ス可シ

芽四十四條○非命死ノアル時又ハ原因ノ知ル
サル死アル時ハアトキリルアムベリアル
醫官二人ヲシテ立會ヲ為サシム可シ但シ醫
官二人ハ其死ノ原因ト死骸ノ模様トニ付キ
申立書ヲ記ス可シ
此條ト前條トニ記シタル立合人ハアトキリ
トルアムベリアル面前ニテ正直ニ其説ヲ
申立ツ可キノ誓ヲ為ス可シ



芽四十五條○アトキリルアムベリアルハ前
數條ニ循ヒ記シタル調書及ヒ其他ノ書類又
其取上ケタル書類又ハ器具類ヲ遅延サツ
下吟味掛リ裁判役ニ送り其裁判役芽六章ニ
記スル如ク處置ス可シ但シ犯人ハアトキリ
トルアムベリアルノ引出狀ニ因以テ之ヲ相當
ノ官吏刑監又ハ兵官吏兵ニ預ケタル儘ニ差
置ク可シ
芽四十六條○現行罪犯ノ場合ニ非スト雖モ家
屋内ニ於テ重罪又ハ輕罪ヲ行フタルニ因リ

其家長ヨリアロキユリユールアムベリアルニ其
罪犯ノ証ヲ立ツ可キ丁ヲ求メタル時ハアロ
キユリユールアムベリアル現行罪犯ノ場合ニ付
キ前數條ニ定メタル權ヲ行フ丁ヲ得可シ
第 四十七條 ○ 第 三十二條 及 第 四十六條ノ場
合ノ外アロキユリユールアムベリアル人ヨリノ
申立ニ因リ又ハ其他ノ方法ニ因リ己ノ管轄
地内ニテ重罪又ハ輕罪ヲ犯シタル者アルコ
ト知リ又ハ犯人己ノ管轄地内ニ在ルコト知
リタ時ハ下吟味掛リ裁判役ニ第 六章ニ記

シタル如ク其取調ヲ為シ又己ムヨ得ザル時
ハ其罪犯ノ場ニ至リテ調書ヲ記ス可キコトヲ
求ム可シ

第 五章 ○ アロキユリユールアムベリアル
輔佐スル警察官吏ノ事

○ 第 四十八條 ○ 治安裁判役備警兵ノ士官、邏卒總
長ハ平常其職務ヲ行フ地ニ於テ犯シタル重
罪又ハ輕罪ノ申立ヲ聽ク可シ
○ 第 四十九條 ○ 現行罪犯ノ時又ハ家長ヨリ求メ
受ケタル時ハ此等ノ官吏調書ヲ記シ証人

申述ヲ聴キ見分ヲ為シ及ヒ其他此場合ニ
於テアロキリユールアムベリアルノ為ス可キ
諸事ヲ為ス可シ但シ此等ノ事ヲ為スニ付テ
ハ、第四章ニ記シタル規則ニ循フ可シ
第五十條○「メ」ル及ヒ其輔佐又ハ邏卒長ハ亦
罪犯ノ申立ヲ聴キ前條ニ記シタル諸事ヲ行
フヲ得可シ但シ此等ノ事ヲ行フニ付テハ
第四章ノ規則ニ循フ可シ
第五十一條○若シ「ア」ロキリユールアムベリアル
ノ權ト前數條ニ記シタル警察官吏ノ權ト相

觸ル、時ハ「ア」ロキリユールアムベリアル司法
警察ノ諸事ヲ行フ可シ若シ前數條ニ記シタ
ル警察官吏先キ其警察ノ處置ニ取掛リタ
ル時ハ「ア」ロキリユールアムベリアル其處置ヲ
為シ始メタル官吏ヲシテ引續キ之ヲ為サシ
ムルヲ得可シ
第五十二條○第三十二條及ヒ第四十六條ニ循
ヒ職務ヲ行フ「ア」ロキリユールアムベリアル有
益ニシテ且必要ナリト思料スル時ハ輔佐ノ
警察官吏ヲシテ自己ノ為ス可キ諸事中其一

部ヲ為サシムルコトヲ得可シ
第五十三條○「ブ」キリユールアムベリアルノ輔
佐ヲ為ス警察官吏ハ犯罪ノ申立書並ニ其調
書及ニ其他ノ書類ヲ遅延ナク「ブ」キリユール
アムベリアルニ送り「ブ」キリユールアムベリ
アルハ即時ニ此等ノ書類ヲ檢視シテ其相當
ト思フ求需ノ書ヲ添ヘ之ヲ下吟味掛リノ裁
判役ニ送ル可シ

第五十四條○司法警察ノ官吏自カラ直ニ証ヲ
立ツルコトヲ得可キ重罪犯又ハ輕罪犯ノ場合

外ハ其罪犯ノ申立書ヲ遅延ナク「ブ」キリ
ユールアムベリアルニ送り「ブ」キリユールアム
ベリアル求需ノ書ヲ添ヘ之ヲ下吟味掛リ
ノ裁判役ニ送ル可シ

第六章○下吟味掛リ裁判役ノ事
第一款○下吟味掛リ裁判役ノ事

第五十五條○一千八百九十六年第七月十七日左
如ク改メ各輕罪裁判所即チ「ブ」キリユール
コングス
ニ設ケタル
民法下等ニ皇帝ノ命ニテ三等間任ヲ受ケタ
裁判所
下吟味掛リ裁判役ヲ置ク可シ但シ其裁判

後ハ更ニ永ク其職ニ在ル丁ヲ得可ク民事ニ
付テハ其任職ノ順序ニ從ヒ席湏ヲ立ツ可シ
又事務ノ繁多ナル「アル」ロ「ン」デ「マ」ニ「於」テ
ハ下吟味掛リ裁判役數員ヲ任スル丁ヲ得可
シ

第五十六條〇一千八百五十六年第七月十七日左
ノ如ク改シ下吟味掛リ裁判役ハ帝負ノ裁判
役中ヨリ選舉シ又ハ裁判役ノ補役中ヨリ之
ヲ選舉ス可シ
又事務ノ繁多ナル裁判所ニ於テハ下吟味掛

裁判役ト共ニ下吟味ノ事ヲ掌ル裁判補役
ヲ假リニ皇帝ヨリ任スル丁ヲ得可シ
第五十七條〇下吟味掛リ裁判役司法警察職
ヲ行フニ付テハ上等裁判所ノ「ア」ロ「キ」リ「シ」ル
ゼ「テ」ラ「止」ル支配ヲ受ク可シ
第五十八條〇下吟味掛リ裁判役一員以テ其
地ニ於テ若シ其裁判役病ニ罹リ又ハ行方知
ラズ又ハ其他ノ差支アル時ハ下等裁判所
リ其裁判役中ノ一員ヲシテ之ニ代ラシム可

○下吟味掛リ裁判役ノ職務

第ニ款 ○下吟味掛り裁判役ノ職務

第一種 ○現行罪犯ノ場合

第五十九條 ○現行罪犯ノ場合ニ於テハ下吟味

掛り裁判役第ニ章ニ記シタル規則ニ循ヒテ

口キユリユールヤムベリアルノ為ニ得可キ諸事

ヲ自カラ取行フヲ得可シ ○下吟味掛リノ

裁判役ハ「ア」口キユリユールヤムベリアルノ立會

ヲ求ムルヲ得可シ但シ之カ為メ其裁判役

ノ為メ可キ處置ヲ遲延ス可カラズ第三十二條見合

第六十條 ○司法警察官吏現行罪犯ノ証

第立テ「ア」口キユリユールヤムベリアルヨリ諸書類

ヲ下吟味掛リ裁判役ニ送りタル時ハ其裁

判役遲延ナク其書類ヲ取調ノ可シ第廿八條

第其裁判役ハ其書類中ニテ完全セズトハ第廿九條

書面ヲ改正スルヲ得可シ第廿九條

第第二種ノ下吟味ノ事第廿九條

第第一節ノ總規則第廿九條

第六十一條 ○一千八百五十六年第七月十七日左

如ク改ム現行罪犯ノ場合ヲ除ク外ハ下

吟味掛り裁判役先ツ罪犯ニ管シタル諸般ノ

書類ヲアロキユリユトルアムペリアルニ送りシ
上ニ非サレハ下吟味ニ取掛ル可カラス但シ
アロキユリユトルアムペリアルハ裁判役既ニ下
吟味ニ取掛リタル後何時ニテモ其諸般ノ書
類ヲ受取ラント求ムルヲ得可久且其書類
ハ之ヲ檢視シタル上二十四時間ニ還ス可シ
然レ下吟味掛リ裁判役ハアロキユリユトルアム
ペリアルノ求メテ待ツニ及ハスシテ犯人引
出状又ハ犯人禁錮状ヲ渡スヲ得可ハ其條
第六十二條ノ下吟味掛リ裁判役罪犯ノ場所ニ

至ル時ハアロキユリユトルアムペリアルハ書記
官トシ同伴ス可シ現行罪犯ノ除キテ
入録罪ノ第二節ノ罪犯申立ノ事
第六十三條ノ何人ニ限ラス重罪犯又ハ輕罪犯
為メ害ヲ受ケタリト述ケル者ハ其犯罪ノ
場所又ハ犯人ノ住所又ハ犯人在ル所ノ下吟
味掛リ裁判役ニ申立テ民事ノ原告人トナル
ヲ得可シ刑事ノ原告人ハアロキユ
リユトルアムペリアルハ
第六十四條ノアロキユリユトルアムペリアルハ差
出シタル罪犯申立書ハアロキユリユトルアムベ

△
此ルヨリ求刑書ヲ添ヘテ之ヲ下吟味掛リ
裁判役ニ送ル可シ又アロキユエールアムベリ
アルノ輔佐ヲ為ス警察官吏ニ差出シタル罪
犯申立書ハ其官吏ヨリアロキユエールアムベ
リアルニ送リアロキユエールアムベリアル求
刑書ヲ添ヘテ之ヲ下吟味掛リ裁判役ニ送ル
可シ

又輕罪犯ノ時ハ其罪犯ノ為メ害ヲ受ケタル
者後ニ第百四十五條第百六十二條見合記スル所ニ
循ヒ直ニ輕罪裁判所ニ申立ルトモ勝手タリ

△
可シ
第六十五條ノ罪犯ノ為メ害ヲ受ケタルヨリ以
外ノ者ハ申立書ニ付キ第三十一條ニ記シタ
ル規則ハ害ヲ受ケタル本人ヨリノ申立書ニ
モ亦通シテ用フ可シ
第六十六條ノ罪犯ノ為メ害ヲ受ケタルト申立
ル者其申立書又ハ後ニ記スル書面ニ民事ニ
原告人タル旨ヲ記スルトモ又ハ此等ノ書
類ニ其損害ノ償ヲ求ムル旨ヲ記スルトモ
時ハ之ヲ民事原告人トシテ看做ス可カラ

又其申立人一度民事ノ原告人トナリタル
ト雖^レ凡^レ二十四時内ニ於テハ原告人タルヲ止
メル旨ヲ被告人ニ言送ル^レト得可シ但シ申
立人タルヲ止メタル時ハ其旨ヲ言送リタル
ヨリ後ノ費用^{裁判所ヲ擔當スルニ及ハス然}
レ^レ凡^レ被告人ノ為メ損失ヲ生シタル時ハ申立
人^ノ之ヲ償^テ可シ^{第百五十八條以下見合}
第六十七條ノ罪犯申立人ハ裁判所ニテ公ケノ
吟味ノ終ル時ニ至ル迄何時ニ於テモ民事ノ
原告人トナリ^ト得可シ但シ一度民事ノ原

告人トナリ^ト者既ニ裁判所ノ裁判言渡カリ
テ後ニ於テハ^ハ縱令二十四時内ニ其原告人々
ルヲ止ムル旨ヲ申述フルト^モ其詮ナカ
ル可シ^{第百五十八條以下見合}
第六十八條ノ何人ニ限テス民事ノ原告人タル
者下吟味ヲ為ス地ノ^ハアルロ^シテ^ハマ^シ内ニ
住セサル時ハ其^ハアルロ^シテ^ハマ^シ内ニ別段
住所ヲ擇ム可シ但シ其旨ヲ書面ニ記シテ裁
判所ノ書記局ニ届出ス可シ^{第百五十八條以下見合}
若シ民事ノ原告人其^ハアルロ^シテ^ハマ^シ内ニ

住所ノ擇セサル時ハ、縦令法律上ニテ当然送達ヲ得可キ書類ヲ受取ラスト、金凡故障ヲ述フ可カラス

第六十九條ノ若シ犯罪ノ地又ハ犯人ノ住所又ハ犯人在ル所ヨリ更ニ他ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ニ罪犯ヲ申立テタル時ハ、其裁判役ヨリ管轄ノ下吟味掛リ裁判役ニ其申立ニ移ス可シ

第七十條ノ前条ノ場合ニ於テ、其申立ヲ聽ク可キ裁判役ハ、其申立書ヲ「ロキユエール」アムベリ、ア止ニ送り、「ロキユエール」アムベリ、ア止ヨリ求刑ノ書ヲ其裁判役ニ出ス可シ

第三節ノ証人ヲ問糾ス事
第七十二條ノ下吟味掛リ裁判役ハ、罪犯申立書ニ因リ、又ハ「ロキユエール」アムベリ、ア止ノ申立ニ因リ、又ハ其他ノ方法ニ因リ、其罪犯並ニ其模様ヲ知り得タルト為ス者ヲ已レノ面前ニ呼出ス可シ

第七十二條ノ証人ハ、「ロキユエール」アムベリア止ノ求メニ因リ、門監又ハ公ケノ兵カラ預カ

此者之ヲ呼出ス可シ
第七十三條の犯人ハ下吟味掛リ裁判役書記官
立會ノ上犯人ノ在ラサル所ニ於テ各自之
ヲ問糾ス可シ

第七十四條の証人ハ其証ヲ陳述スル前ニ其呼
出状ヲ差出ス可シ但シ此事ハ調書ニ記ス可
シ

第七十五條の証人ハ遺漏ナク正実ヲ述ヘ且正
実ノ外述ヘサルノ誓ヲ為シタル上ニ下吟
味掛リ裁判役其姓名年齢身系職業住所ヲ問

糾シ又原告人或ハ被告人ノ僕婢親族タルヤ
ヲ問糾シ親族タル時ハ何級ノ親族タルヤ
ヲ問糾ス可シ但シ此等ノ問糾及ビ返答ハ調書
ニ記ス可シ
第七十六條の証人ノ申述書ニハ裁判役及ビ書
記官姓名ヲ手署シ且之ヲ証人ニ読聞カセ証
人其通リニテ相違ナキ旨ヲ述ヘタル上之ヲ
姓名ヲ手署ス可シ若シ其証人姓名ヲ手署ス
ルヲ得ス又ハ手署スルヲ欲セサル時ハ
其旨ヲ附記ス可シ

其申述書ニハ裁判役及ヒ書記官毎葉姓名ヲ
手署ス可シ

第七十七條ノ若シ書記官又ハ下吟味掛リ裁判
役前三條ニ記シタル規則ニ背ク時ハ書記官
ハ五十ノフランクノ罰金ヲ言渡サレ裁判役ハ
損害ヲ償フ可キノ訴ヲ受ク可シ

第七十八條ノ証人ノ申述書ニハ文中書入ヲ為
ス可カラス塗抹及ヒ欄外ノ記入ハ裁判役書
記官証人皆之ヲ認メテ姓名ヲ手署ス可ク若
シ此規則ニ背ク時ハ前條ニ記シタル罰金ヲ受

ク可シノ塗抹及ヒ欄外ノ記入ヲ認メタリト
記セサル時ハ其効ナキモノトス

第七十九條ノ男女ヲ論セス十五歳以下ノ幼者
ハ誓ヲ為スナク証ヲ申述ルヲ得可シ

第八十條ノ証人トシテ呼出ラ受ケタル者ハ其
呼出状ニ從ヒ出席ヲ為ス可シ若シ出席ヲ為
ササル時ハ下吟味掛リ裁判役ノ口キユリニ
アムベリアルノ求メニ從ヒ百ノフランクノ過
キナル罰金ヲ言渡シ且其証人トシテ証ヲ述
ベシムル為人ノ之ヲ列出ス可キ旨ヲ言渡ス可

之但ニ其言渡ヲ為スニ付テハ別段法式ヲ用
フルト及ヒ猶豫ヲ許ルストナカル可ク又其
言渡ヲ控訴ス可カラス

第八十一條の一度呼出ラ受ケテ出席セサルニ
回リ罰金ヲ言渡サレシ証人再度ノ呼出ノ時
出席ヲ為シ以前出席セサリシ正当ノ原因ヲ
裁判役ニ申述ヘタル時ハ裁判役ハロキユリユ
ルアニペリアルノ求メニ從ヒ其罰金ヲ差免
ルス可シ

△

第八十二條の証人償即チ裁判所ニ出ルニ付テ
諸費用ノ償ヲ云フヲ

得ニト求ムル時ハ下吟味掛リ裁判役其償
高ヲ定ム可シ

第八十三條の若シ醫官ハ證書ニ因リ証人呼出
状ニ從ヒ出席ヲ為ス不能ハサルリ証アル時
其証人其裁判役所在ノ地ノカントニ内ニ住
スルニ於テハ裁判役自カラ其住所ニ至ル可
シ

若シ証人其カントニ内ニ住セサル時ハ下吟
味掛リ裁判役其証人住所ノカントニ内ノ治安
裁判役ニ其証人ノ申述ヲ聽ク可キヲ任ス

可也但之此場合ニ於テハ下吟味掛リ裁判役ヨリ其治安裁判役ニ証人ノ証ヲ述フルニ付テノ事件ヲ知ラシムル為メ覺書並ニ差図書ヲ送ル可シ

第八十四條〇若シ証人下吟味掛リ裁判役ノ管轄地外ニ任スル時ハ其裁判役ヨリ証人住所ノ地ヲ管轄スル下吟味掛リ裁判役ニ其証人ノ申述ヲ聴ク為メ其住所ニ至ル可キ旨ヲ求ム可シ

若シ証人其求メヲ受ケタル下吟味掛リ裁判

役所在ノ地ノ内ニ住セサル時ハ其裁判役其証人住所ノ地ニ治安裁判役ヲ申述ヲ聴カシムルノ前条ニ記スル所ト同一ナリトス

第八十五條〇第八十三條及ヒ第八十四條ニ循ヒ証人ノ申述ヲ聴キタル裁判役ハ其申述書ニ封印ヲ為シテ其罪犯ヲ管轄スル下吟味掛リ裁判役ニ之ヲ送ル可シ

第八十六條〇若シ前三條ニ記シタル如ク裁判役証人住所ニ至リタル場合ニ於テ其証人

出席ヲ為シ得可カラサル模様ナキ時ハ裁判
彼其証人ト証書ヲ差出シタル醫官トニ対シ
禁錮状ヲ出ス可シ

其刑ハ其地ノ下吟味掛リ裁判役第百八十条ニ
記シタル規則ニ循ヒテゴロキユリトルアシペリ
アルノ求メヲ得タル上之ヲ言渡ス可シ

第百四節〇罪犯ニ付テハ証書ノ事
第百八十七條〇下吟味掛リ裁判役ハ罪犯ノ事實
ヲ分明ナラシムル為メ有益ナリト思フ書類
器具及ヒ其他ノ物件ヲ穿鑿ノ為メゴロキユリ

ナルアシペリアルノ求メニ從ヒ又ハ自己
職務ヲ以テ犯人ノ住所ニ至ル可シ

第百八十八條〇又下吟味掛リ裁判役犯人ノ住所
外ニ前条ニ記シタル物件ヲ匿シ置キタルト
思料スル時ハ其場所ニ至ル可シ

第百八十九條〇現行罪犯ノ場合ニ於テゴロキユ
トルアシペリアルノ穿鑿シタル物件ヲ取上
タル事ニ付キ第百二十五條第百三十六條第百三十

七條第百三十八條第百三十九條ニ記シタル規則
ニ依リ下吟味掛リ裁判役ニ通シ用フ可シ

第九十條○若シ穿鑿ス可キ書類及ヒ物件、下吟味掛リ裁判役ノ管轄外ニアル時ハ、其所存ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ニ前教条ニ記シタル如ク處置ス可キヲ求ム可シ

第七章○呼出状引出状禁錮状収監状ノ事

第九十一條○(千八百六十五年第七月十四日左ノ如ク改シ重罪及ヒ輕罪ヲ論セス、下吟味掛リ裁判役ハ、被告人ニ呼出状ノミヲ送ル可シ、但シ問糾ノ上ハ、呼出状ヲ其他相当ノ書状禁

○錮状収監状ヲ云フ

ト易テアルヲ得可シ

ハ外置カ

若シ被告人呼出状ニ從ヒ出席セサル時ハ、下吟味掛リ裁判役其被告人ニ對シ引出状ヲ出ス可シ

第九十二條○又下吟味掛リ裁判役ハ、第八十條

ニ記シタル如ク呼出ニ從ハサル証人ニ對シ

引出状ヲ出ストテ得可シ、但シ其証人ハ同条

ニ記シタル如ク罰金ヲ言渡サル可シ

第九十三條○下吟味掛リ裁判役呼出状ヲ渡シタル時ハ、被告人ノ出席次第之ヲ問糾ス可シ

又引出状ヲ出シタル時ハ、被告人出席シタル
ヨリ二十四時間ニ之ヲ問糺ス可シ
第九十四條〇(千八百六十五年第七月十四日左
ノ如ク改シ)被告人ヲ問糺シタル後、又ハ被告
人逃亡シタル時、其罪禁錮以上ノ刑ニ處ス可
キ者タルニ於テハ、下吟味掛リ裁判役、其被告
人ニ對シ禁錮状又ハ収監状ヲ出ス可シ得可
シ
下吟味掛リ裁判役ハ、^ハガロキユリトルアムベリ
アルノ説ヲ聞キタル上ニ非サレハ、収監状ヲ

假綴

出ス可カラズ
下吟味掛リ裁判役ハ、其吟味ヲ為ス間、被告人
ノ申立ラレタル罪犯ノ種類如何ナルヲ問ハ
ス、^ハガロキユリトルアムベリアルノ申立ニ從ヒ
犯人ヲシテ何時ニ於テモ言附次第吟味ノ席
ニ出テ且裁判言渡ノ執行ヲ為シ出席ス可キ
ハ盟約ヲ為サシメタル上、禁錮状又ハ収監状
ノ効ヲ假リニ解除スルヲ得可シ。〇其解除
ノ言渡ハ、故障ヲ述フ可カラズ
第九十五條〇引出状、引出状、禁錮状ハ、之ヲ出シ

タル者姓名ヲ手署シテ印ヲ押ス可シ
此等ノ書ニハ被告人ノ姓名、住所、職業、身分、年
齡等ヲカメテ詳細ニ記ス可シ

第九十六條○收監状ニ付テモ亦前条ニ記シタ
ル如キ法式ヲ用ヒ且之ヲ出スニ付テノ罪犯
ノ大畧ト之ヲ重罪又ハ輕罪ト為ス法律書ノ
抄出トヲ記ス可シ

第九十七條○呼出状引出状禁錮状收監状ハ門
監又ハ公ケノ兵力ヲ預カル官吏之ヲ被告人
ニ示シテ其寫ヲ渡ス可シ

第九十八條○呼出状引出状禁錮状收監状ハ
蘭西全國中何レ地ニ於テモ之ヲ執行ス可シ
モ之ヲ其被告人ニ示シテ其寫ヲ渡ス可シ

若シ被告人禁錮状又ハ收監状ヲ出シタル官
吏ノ管轄地外ニ在ル時ハ之ヲ治安裁判役又
ハ其輔役又其アヲサレ時ハ之ヲ又ハ其輔
佐又ハ邏卒長ノ面前ニ引出シ此等ノ官吏其
禁錮状又ハ收監状ニ檢印ス可シ但シ此等ノ
官吏ハ其禁錮状又ハ收監状ノ執行ヲ妨ク可

捕縛

第九十九條○被告人引出状ニ後ニ出席スル
ヲ肯セス又ハ之ヲ肯シタル旨ヲ述ヘタル上
ニテ逃亡セントスル時ハ之ヲ召捕ヲ可シ
引出状ヲ送達スル官吏己ムヲ得ナル時ハ最
近ノ公ケノ兵力ヲ借リ求ム可シ但シ公ケノ
兵力ヲ預カル者ハ引出状ニ求援ノ旨ヲ記シ
タルヲ見タル上ニテ即時ニ其兵ヲ進行セ
シム可シ

至リ被告人其引出状ヲ出シタル官吏ノ管
轄外ニテ其官吏所在ノ地ヨリ五里内
トシ以上ノ地ニアル時ハ被告人必スモ
其引出状ニ後ニ之ヲ出シタル官吏ノ面前ニ
至ルニ及ハス但シ此場合ニ於テハ被告人其
所在ノ地ノ「ロキユ」トアル「ル」面
前ニ出ツ可シ其官吏ハ禁錮状ヲ出シテ其被
告人ヲ輕罪裁判所附ノ獄舎ニ繋ク可シ
然レモ引出状ヲ出シタルヨリ幾許ノ日教ヲ經
タレト被告人如何ニ遠隔ノ地ニ至リタルト

ヲ問ハス被告ノ罪状又ハ後タル可シト
恩料ノ可キ器具書類物件ヲ所持シタル時ハ
引出状ニ記シタル如ク執行ヲ可シ即チタル
官吏ノ面前ニ至ル可キヲ云フ

第百二條○前條ノ場合ニ於テ禁錮状ヲ出シタ
ルハ口キユリユールアムベリアル被告人ヲ獄舎
ニ繋キタルヨリ二十四時内ニ嘗テ引出状ヲ
出シタル官吏ハ下吟味裁判役又ハ「口キユリ」
ニ其旨ヲ報告シ且調書アラバ之ヲ其官吏ニ
送ル可キト告入其旨出シタル官吏ニ

第百二條○嘗テ引出状ヲ出シタル官吏ハ「口キユリ」
ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ自己ト同所
ノ下吟味掛リ裁判役ニ其報告ヲ為シ且調書
ヲ送り其裁判役第九十條ニ循ヒ處置ス可シ
第百三條○嘗テ其罪状ノ申立ヲ聴キタル下吟
味掛リ裁判役ハ被告人所在ノ地ノ下吟味掛
リ裁判役ハ罪状ニ管シタル書類及ヒ覺書並
ニ其他其罪状ヲ分明ナラシムル諸件ヲ記シ
タル書面ヲ送り其被告人ヲ問ヒス可キヲ

求ム可シ
其問糾ヲ為シタル下吟味掛リ裁判役ハ此等
ノ書面ヲ問糾書ト共ニ嘗テ罪犯ノ申立ヲ聽
キタル裁判役ニ送り還ス可シ

第四百條○(千八百五十六年第七月十七日左ノ
如ク改ム前條ノ場合ニ於テ嘗テ罪犯ノ申立
ヲ聞キタル下吟味掛リ裁判役ハ下吟味ノ手
続ヲ為ス時間即チ被告人所在ノ地ノ裁判役
問糾ヲ為シタル上書類ヲ還シ
タル後收監状ヲ出シ自己ノ所在ノ地ノ輕罪
裁判所附ノ獄舎ニ其被告人ヲ移ス可キ旨ヲ

言渡スルヲ得可シ
若シ其下吟味掛リ裁判役收監状ヲ出スト雖
モ其所在ノ地ノ輕罪裁判所附ノ獄舎ニ被告
人ヲ移ス可キ旨ヲ別段記セサル時ハ其裁判
役第四百二十七條第四百二十八條第四百二十九條
第四百三十條第四百三十一條第四百三十二條第四百
三十三條ニ循ヒ言渡ヲ為スニ至ル迄其被告
人ヲ其所在ノ地ノ輕罪裁判所附ノ獄舎ニ入
リ置ク可シ
第四百五條○若シ被告人ニ對シ引出状ヲ出シタ

此時其被告人在ラサルニ於テ其引出状ヲ被告人住所ノコトニテメイル又ハ其輔佐又ハ邏卒長ニ示ス可シ

此等ノ官吏ハ其引出状ノ正本ニ檢印ス可シ
第百六條 ○公ケノ兵カヲ預カル官吏又ハ其他何レノ人タリモ施体又ハ加辱ノ刑ニ處セラル可キ罪ヲ現ニ行フ犯人又ハ衆人ニ罪犯ヲ高聲ニ呼ビ追ハルル犯人又ハ其他現行ノ罪犯ニ等シキ模様アル犯人ヲ召捕ヘテ「アロキニ」信ルアムベリアルノ面前ニ連行ク可シ但シ

此場合ニ於テハ別段引出状アルヲ必要トセズ

第百七條 ○輕罪裁判所附ノ獄舎ニ於テハ被告人ノ禁錮状ヲ見タル上ニテ其被告人ヲ受取ル其獄監禁錮状ノ執行ヲ任セテタル門監又ハ公ケノ兵カヲ預カル官吏ニ被告人ヲ受取りタル証書ヲ渡ス可シ
第百八條 ○禁錮状又ハ収監状ヲ執行ノ任ヲ受ケタル官吏ハ被告人ノ逃亡ヲ防クニ是レ可キ人数ヲ同伴ス可シ

其人数ハ禁錮状又ハ収監状ヲ執行ノ可キ場
所ニ最近ナル地ヨリ之ヲ連行ク可シ但シ
其兵ノ指揮官ハ禁錮状又ハ収監状ニ記シタ
ル如ク其求メテ受ケタル時直ニ其人数ヲ進
行セシム可シ第九十九條見合
第百九條〇若シ被告人ヲ召捕フルヲ得サル時
ハ其被告人ノ最終ノ住所ニ収監状ヲ送りテ
探索ノ調書ヲ記ス可シ
其探索ノ調書ハ収監状ヲ持行ク官吏被告人
ノ近隣ノ者二人ノ面前ニ於テ之ヲ記シ此等

ノ者姓名ヲ手署ス可シ若シ此等ノ者姓名ヲ
手署スルコトヲ知ラス又ハ之ヲ欲セサル時ハ
其旨ヲ附記シ並ニ其手署ヲ為サザルニ付テ
ノ問ハレノ旨ヲモ附記ス可シ
收監状ヲ持行キタル官吏ハ其後治安裁判役
又ハ其補役ヲシテ探索ノ調書ニ檢印ヲ為サ
シメ又其アラサル時ハ其場所ノ「メイル」又ハ
其輔佐又ハ邏卒長ヲシテ其檢印ヲ為サシメ
且其調書ノ寫ヲ渡シ置ク可シ
其後ニ至リ収監状ト探索ノ調書トヲ裁判所

其書記局ニ納ム可シ
第百十條○收監状又ハ禁錮状ニ因リ召捕ヘタ
ル被告人ハ其書ニ記シタル輕罪裁判所附ノ
獄舎ニ遲延ナク繫ク可シ

第百十一條○禁錮状又ハ收監状ヲ執行フ可キ
官吏ハ被告人ヲ輕罪裁判所附ノ獄舎ノ獄監
ニ引渡シ獄監其受取証書ヲ渡ス可シ但シ此
等ノ事ハ第百七條ニ記スル所ニ循フ可シ
其禁錮状又ハ收監状ヲ執行フ可キ官吏ハ其
後召捕ニ付テノ書類ヲ輕罪裁判所ノ書記局

出シ其受取書ヲ取置ク可シ
其官吏ハ二十四時内ニ獄監ノ受取書ト書記
官ノ受取書トヲ下吟味掛リ裁判役ニ示シ其
裁判役其二通ノ受取書ニ之ヲ檢視シ以ル旨
ヲ記シ且其日附ヲ記シテ之ニ姓名ヲ手署ス
可シ

第百十二條○若シ書記官呼出状引出状禁錮状
收監状ニ付テノ法式ニ背ク時ハ五ツラシ
ク以上ノ罰金ヲ言渡サシ又下吟味掛リ裁判
役或ハ口キエルアムニ其法式ニ

背ク時ハ、以後再ヒ其法式ニ背ク事ナカル可
キノ戒ヲ受ケ、又別段ノ道理アル時ハ、損失ノ
償ヲ為ス可キノ訴ヲ受ク可シ。

第八章○被告人ヲ假リニ赦宥スル事及
ヒ保証ノ事

第百十三條○(千八百六十五年第七月十四日左
ノ如ク改ム)如何ナル罪犯ニ付テモ、下吟味掛
リ裁判後被告人ノ求メニ因リ、且「ア」口キユリ
ルアムペリアルノ申立ニ從ヒ、其被告人ヲ假
リニ赦宥スル事ヲ言渡スヲ得可シ、但シ被告

人ハ言附ヲ受ケ次才吟味ノ席ニ出テ、且裁判言
渡ノ執行ノ為メ出席ス可キノ盟約ヲ為ス
ヲ必要トス、
輕罪ニ付キ、二年間ノ禁錮以下ノ刑ニ處セラ
ル可キ罪ヲ申立テラレタル時ハ、定リタル住
所アル被告人間、糾ヨリ五日ノ後ニ至リ、当然
假リノ赦宥ヲ得可シ、
既ニ一度重罪ノ為メ刑ヲ言渡サレタル被告
人、又ハ既ニ一度一年以上禁錮ノ刑ヲ言渡サ
レタル被告人ニハ、前項ノ規則ヲ通シ用フ可

カラス

第百十四條〇(千八百六十五年才七月十四日左

ノ如ク改ム被告ノ当然假リノ赦首ヲ得可キ

場合ノ外ハ必ス才百二十条ニ記シタル如ク

保証ヲ立ルヲ必要トス〇其保証ハ左件ヲ

受合フ為メナリトス

第一〇被告人吟味ノ席ニ出ツ可キ事及ヒ

裁判言渡ノ執行ニ出席ス可キ事

才三〇左ノ諸件ヲ拂フ可キ事

刑事ノ訴ノ費用

民事ノ訴ノ費用

第百十六條 罰金

下吟味掛リ裁判役被告ノ假リニ赦看スル

言渡書ニハ第一ノ分ニ付テノ保証高ハ幾許

第二ノ分ニ付テノ保証高ハ幾許タルヤラ足

ム可シ

第百十五條〇(千八百六十五年第七月十四日左

ノ如ク改ム)下吟味掛リ裁判役被告ノ假リ

ニ赦看シタルト雖モ取調ノ上ニテ更ニ已ム

ヲ得サル重劇ノ事矣ヲ知ル下アル時ハ其被

告人ニ對シ、更ニ引出狀禁錮狀收監狀ヲ出ス
テ得可レ。然レモ上等裁判所ノ重罪取調
局ニテ、下吟味掛リ裁判役ノ言渡ヲ更改シ、被
告人ヲ假リニ教旨シタル時ハ、上等裁判所ニ
テ、^テニステールビエアリックノ申立ヲ聽キタル
上、被告人ヲ教旨セシ言渡ヲ取消シタル後ニ
亦サレハ、下吟味掛リ裁判役其被告人ニ對シ
更ニ引出狀禁錮狀收監狀ヲ出ス可カラズ
第百十六條〇(千八百六十五年第七月十四日左
ノ如ク改ム)吟味中何時ニテモ被告人左ノ裁

判所ニ假リテ赦宥ヲ得ニト求ム。然レモテ得可
レ。然レモテ下吟味掛リ裁判役ノ言渡ヨリ、^ク重罪裁判所
ニ訴テ移スニ至ル迄ハ、上等裁判所ノ重罪
取調局ニ求ム可シ。
下吟味掛リ裁判役輕罪裁判所ニ訴テ移シ
タル時ハ、輕罪裁判所ニ求ム可シ。
刑事ノ訴ニ付キ、輕罪裁判所ノ言渡ヲ控訴
シタル時ハ、上等裁判所(輕罪控訴局)ニ求ム
可シ。若シ既ニ刑ヲ言渡サレタル者、第四

百二十一條ニ循ヒ、覆審院ニ訴出スルコトヲ
得ニカ為メ、假リノ赦宥ヲ得ント欲スル時
ハ其刑ヲ言渡シタル重罪裁判所又ハ輕罪
裁判所ニ求ム可シ

第百十七條〇(千八百六十五年第七月十四日左
ハ如ク改ム)前條ニ記シタル場合ニ於テハ被
告人願書ヲ差出シ、裁判所ニ於テハ裁判役會
議ノ室ニテ、¹ニステ、¹ルビユアリツルノ申立ヲ
聽キタル上、假リニ赦宥ス可キヤ否ヲ言渡ス
可シ。〇被告人ハ其願書ノ趣意ヲ辯解スル為

メ、書面ヲ其願書ニ添ヘテ差出スルヲ得可

第百十八條〇(千八百六十五年第七月十四日左
如ク改ム)被告人假リノ赦宥ヲ願フ書面ハ
民事ノ原告人又ハ其住所又ハ其別段擇ミタ
ル住所ニ送ル可シ。〇民事ノ原告人ハ被告人
ノ願書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ自己
ノ趣意ヲ弁解スル書面ヲ差出ストヲ得可シ。
第百十九條〇(千八百六十五年第七月十四日左
如ク改ム)刑口キユトアルアムベリマ止下吟

味掛リ、裁判役ノ言渡、又ハ裁判所ノ言渡シニ
有キ、假テリノ言渡ヲ云故障ヲ述ヘ、又ハ之ヲ
控訴セントスル時ハ、其言渡ノ時ヨリ二十四
時内ニ之ヲ為ス可シ、又被告人、或ハ民事ノ原
告人、此等ノ言渡ニ付キ、故障ヲ述ヘ、又ハ之ヲ
控訴セントスル時ハ、其言渡書ヲ受取リタル
時ヨリ二十四時内ニ之ヲ為ス可シ、○其故障
ノ申述又ハ控訴ハ、別段書記局ニ設ケ置キタ
ル簿冊ニ之ヲ登記ス可シ、○プロキユールルゼ
子ラルハ、**第百三十五條**ノ最終ハ三項ニ記シ

タル法式ト定期トニ循ヒ、言渡ニ付キ、故障ヲ
述フルノ権アリ

保証銀

第百二十條、○(千八百六十五年才七月十四日左
ノ如ク改ム)被告人假リノ赦宥ヲ得ルニ付キ、
保証ヲ立ツ可キ時ハ、本人又ハ他人ヨリ其保
証ノ金高ヲ差出ス可シ、但シ其高ハ、其時ノ模
様ニ因リ、下吟味掛リ裁判役之ヲ定メ、又ハ輕
罪裁判所、或ハ上等裁判所ヨリ、之ヲ定ム可シ、
○又人總テ金高ヲ拂フニ差支ナキ者ハ、被告人
ノ裁判所ノ言附次才、必ス出席セシム可ク、若

然ラサレハ定メ通リノ金高ヲ官ニ納ム可
キノ盟約ヲ為シテ被告人ニ假リノ赦宥ヲ得
セシムルヲ得可シ

第百二十一條〇(千八百六十五年才七月十四日
左ノ如ク改ム保証ノ金高ヲ差出ス可キ時ハ
之ヲ記録税受取人ニ納ム可シ然ル上ニテ「
ニステール」ビュブリック其受取人ノ受取書ヲ檢
視シ假リノ赦宥ノ言渡ヲ執行フ可シ又他
人ノ盟約ニ因リ赦宥ス可キ時ハ裁判所ニテ
書記局ニ差出シタル盟約書ヲ檢視シタル上

第其赦宥ヲ言渡ス可シ〇保証ノ有無ヲ問ハス
假リノ赦宥ヲ求ムル被告人ハ下吟味掛リ裁
判役ノ吟味ヲ受ル間ハ先ツ其裁判役所在ノ
地ニ住所ヲ擇ミテ其旨ヲ報告スル書面ヲ書
記局ニ差出ス可シ又輕罪裁判所又ハ上等裁
判所ノ吟味ヲ受クル時ハ先ツ此等ノ裁判所
所在ノ地ニ其住所ヲ擇ミテ其旨ヲ報告スル
書面ヲ書記局ニ差出ス可シ

第百二十二條〇(千八百六十五年第七月十四日
左ノ如ク改ム)被告ノ聲テ約シタル所ニ違ハ

吟味ノ席ニ出テ且裁判言渡ノ執行ニ出席
責有止時ハ保証ノ義務ヲ解除ス可シ○若シ被
告人正當ノ原由ナクシテ吟味ノ席ニ出テス
又ハ裁判言渡ノ執行ニ出席セサル時ハ保証
高ノ中第一ノ分第百十四條ニ記スヲ官ニ取
上ク可シ○然レモ裁判所ヨリ被告人ヲ無罪ナ
ルト言渡シ又ハ其罪ヲ赦ス可キコトヲ言渡ス
時ハ其言渡各ニ官ニ取上ケシ保証高第一ノ
分ヲ被告人ニ還ス可キコトヲ附記スルヲ得可
シ

第百二十三條○(千八百六十五年第七月十四日
左ノ如ク改シ)保証高ノ中第二ノ分ハ被告人
ヲ無罪ナリト言渡シタル時又ハ其罪ヲ赦ス
可キコトヲ言渡シタル時ハ必ス之ヲ被告人ニ
還ス可シ○又被告人刑ヲ言渡サレタル時ハ
第百十四條ニ記シタル順序ニ從ヒ之ヲ裁判
所費用高ト罰金トシ充テ用ヒ猶餘分アラハ
之ヲ還ス可シ
第百二十四條○(千八百六十五年第七月十四日
左ノ如ク改シ)「ニステール」ト云フルハ自己

ノ職務ニ因リ、又ハ民事原告人ノ求メニ因リ、
第百二十二條ニ記シタル被告人ノ答ヲ誌ス
ル書記官ノ真正ナル受合書、又ハ第百二十三
條ニ記シタル刑ノ言渡書ノ抜書ヲ、記録稅役
所ニ出ス可シ。若シ保証高ヲ納メサルコト
ル時ハ、記録稅役所ニテ之ヲ納メシムル手續
ヲ為シ、猶之ヲ納メサルニ於テハ、其者ヲ召捕
ス可シ。○金高預リ役所巴里ニハ金高預リ役
所ヲ設ケルト、
他ノ地ニ於テハ、
ノ職ヲ兼ス、故ニ此所ニ預リ役所トアリ、
其
子前ニ記録稅役所ト記シタル
ルモ、ト差異ナカシキ可シ。其保証高

第百二十五條。○若シ此等ノ事ニ付キ、争ハ生スル時
ハ、願者ヲ出シタル上、裁判役會議ノ室ニテ裁
判言渡ノ執行ニ附帯シタル訴トシテ、之ヲ裁
判ス可シ。
第百二十五條。○(今八百六十五年)第七月十四日
左ノ如ク改ム。若シ被告人假リノ赦宥ヲ得タ
ル後、呼出ヲ受ケテ出席セサル時ハ、下吟味掛リ
裁判役、又ハ輕罪裁判所、或ハ上等裁判所ヨリ、
收監狀、又ハ禁錮狀、或ハ召捕狀、輕罪裁判所又
上等裁判所

ヨリ出ス所ニシテ、其實收監ヲ出スヲ得可
状、其銅状ト異ナルトナリ

第百二十六條〇(千八百六十五年第七月十四日

左ノ如ク改ム)重罪裁判所ニ出ツ可キ被告人

ハ、假令假リノ赦宥ヲ得タルト、虽、凡上等裁判

所ノ重罪取調局ノ言渡書ニ附記シタル召捕

ノ言渡ニ因リ、必ス之ヲ裁判所附ノ獄舎ニ繋

ク可シ

第九章〇下吟味掛リ裁判役吟味ヲ為シ

下終リタル時ノ言渡

第百二十七條〇(千八百五十六年第七月十七日

左ノ如ク改ム)下吟味掛リ裁判役吟味ヲ為シ

終リタル時ハ、直ニ其吟味ノ書類ヲ「アロキエリ

トル」アムベリアルニ送り、^{レキシオン}「アロキエリ

トル」アムベリ、^{レキシオン}三日内ニ求刑書ヲ其裁判役

ニ送ル可シ

第百二十八條〇(千八百五十六年第七月十七日

左ノ如ク改ム)下吟味掛リ裁判役被告人ノ申

立ラレシ罪犯、重罪ニモ輕罪ニモ誣誤ニモ非

ズト思フ時、又ハ被告人ニ罪犯ノ徵憑ナシト

思フ時ハ其被告人無罪ナルノ言渡ヲ為シ若
シ既ニ被告人ヲ獄舎ニ入レ置キタル時ハ之
ヲ赦宥ス可シ

第百二十九條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改シ)下吟味掛リ裁判役被告人ノ罪
犯ヲ誣誤ナリト思フ時ハ被告人ヲ誣誤裁判
所ニ移シ既ニ其被告人ヲ獄舎ニ入レ置キタ
ル時ハ之ヲ假リニ赦宥ス可シ

此條及ヒ前條ノ規則ヲ以テ後ニ記スル所ノ
民事原告人ノ權又ハ刑事原告人ノ權 第百三
十五條

所ニ記スル所ノ差支トナルトナカレ可シ

第百三十條〇(千八百五十六年第七月十七日九
ハ如ク改シ)下吟味掛リ裁判役被告人ニ輕罪
アリト思フ時ハ其被告人ヲ輕罪裁判所ニ移
ス可シ

此場合ニ於テ被告人ノ罪禁錮以上ノ刑ニ處
セラル可キ時既ニ獄ニ繫カレタルニ於テハ
其囚獄ニ繫キ置ク可シ

第百三十一條〇若シ其被告人ノ罪禁錮以下ノ
刑ニ處セラル可キ時ハ其被告人ヲシテ定日

ニ管轄ノ裁判所ニ出席スルノ盟約ヲ為サレ
兼大之ヲ假リニ赦宥スルヲ得可シ

第百三十三條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改ム)下吟味掛リ裁判役被告人ヲ註
誤裁判所ニ移シタル時又ハ輕罪裁判所ニ移
シタル時ハ「プロキユール」アムペリアニ送テ
ノ証書類ニ番号ヲ附シタル上ニテ遅ク凡ニ
十四時内ニ其証書類ヲ掛リノ裁判所ニ出ス
可シ
被告人ヲ輕罪裁判所ニ移シタル時「プロキユ

ル」アムペリアニ送テ第百八十四條ニ記シタ
ル期限内ニ最近ノ吟味ノ日ニ出席ス可キ呼
出状ヲ二十四時内ニ其被告人ニ送ル可シ
第百三十三條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改ム)下吟味掛リ裁判役被告人ノ罪
施体又ハ加辱ノ刑ニ處セラル可シト思ヒ婦
重罪且罪犯ノ徵憑ニ慥カナリト思ノ時ハ下吟
味ノ書類罪犯ニ送テタル諸器具及ヒ物件ノ
模様ヲ記シタル調書罪犯ノ証書類ノ月
録ヲ「プロキユール」アムペリアニ送テ

ク上等裁判所ノアロキユリトルセ子ラ此ニ送
テ以テアロキユリトルセ子ラ此ニ送
第一章ニ記シタル如ク處置ス^{ルニ借ス}可シ
罪犯ノ証タル証書類ハ下吟味掛リ裁判役之
ヲ預リ置ク可シ但シ其書類ハ第二百二十八
條及ヒ第二百九十一條ノ場合ニ至リ之ヲ上
等裁判所又ハ重罪裁判所ニ差出ス可シ
第百三十四條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改メ)第百三十三條ニ記シタル場合
ニ於テハ上等裁判所^{重罪取}ニテ言渡ヲ為ス

ニ至ル迄被告人ニ對シテ出シタル禁錮狀又
ハ收監狀ヲ其儘執行ニ置ク可シ
第百二十八條第百二十九條第百三十條第百
三十一條第百三十三條ノ規則ニ循ヒ下吟味
掛リ裁判役ノ為シタル言渡ハアロキユリトル
アムペリアルノ求刑書ノ求^未ニ附記ス可シ
其言渡書ニハ被告人ノ姓名、年齢、出產ノ地、住
所、職業、罪犯ノ模様及ヒ其罪犯ヲ法律上ニテ
重罪又ハ輕罪ト為ス事並ニ罪犯ノ憑據ノ有
無ヲ記ス可シ(千八百五十六年第七月十七日)

第百三十五條〇(千八百五十六年第七月十七日)

左ノ如ク改ム。凡口立止トルアムベリア止ハ如何ナル場合ニ於テモ下吟味掛リ裁判役ノ言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ

民事ノ原告人ハ第百十四條第百二十八條第百二十九條第百三十一條第五百三十九條ノ

場合ニ於テ為シタル言渡及ヒ其他其民事ノ權利ヲ害スル然テハ言渡ニ付キ故障ヲ述フ

ルヲ得可シ。被告人ハ第百十四條及ヒ第五百三十九條ノ

場合ニ於テ為シタル言渡上訴ニ付キ故障ヲ

述フルヲ得可シ。凡口立止トルアムベリア止ハ言渡ノ時ヨリ

二十四時間ニ其故障ヲ申述フ可ク民事ノ原告人及ヒ獄ニ繫カレサル被告人ハ裁判所

在ノ地ニ其別段擇ミタル住所ニテ言渡書ヲ受取りタル時ヨリ二十四時間ニ故障ヲ述フ

可ク又獄ニ繫カレタル被告人ハ書記官其言渡書ヲ示シタル時ヨリ二十四時間ニ故障ヲ

述フ可シ

民事ノ原告人及ヒ獄ニ繫カレサル被告人、
住所ニ言渡書ヲ送達スル事並ニ獄ニ繫カレ
タル被告人ニ言渡書ヲ示ス事ハ其言渡アリ
レヨリ二十四時間ニ之ヲ為ス可シ
其故障ヲ申述フル書面ハ上等裁判所ノ重罪
取調局ニ差出ス可シ但シ其重罪取調局ニテ
ハ他ノ事件ノ取調ヲ止メテ先ツ其故障ノ申
述ヲ裁決ス可シ
書類ヲ上等裁判所ノ「アロキユールゼ子」ラ
ニ送達ス可キ「第百三十三條」ニ記スル所ノ

如クタル可シ
獄ニ繫カレタル被告人ハ故障申述ノ裁決ア
ル迄ハ其儘獄ニ繫キ置キ又故障ヲ申述一サ
ル時ハ故障ヲ申述ルヲ得可キ期限ノ終リニ
至ル迄其儘獄ニ繫キ置ク可シ
又何レノ場合ニ於テモ上等裁判所ノ「アロキユ
ールゼ子」ラルハ言渡ニ付キ故障ヲ申述フ
ル「アロキユールゼ子」ハ下吟味掛リ裁判役
ノ言渡ヨリ十日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ申

述フルヲ得可シ

アロキユリユールゼ子ラルルノ故障ヲ申述ハタルニ管セズ被告人ヲ赦宥スルノ言渡アル時ハ假リニ其言渡ノ如ク執行フ可シ

第百三十六條ノ民事ノ原告人言渡ニ付キ故障ヲ述ヘ終ニ負訴訟トナル時ハ被告人ニ對シ損失ノ償ヲ為ス可キノ言渡ヲ受ク可シ

民事ノ原告人言渡ニ付キ故障ヲ述ヘ終ニ負訴訟トナル時ハ被告人ニ對シ損失ノ償ヲ為ス可キノ言渡ヲ受ク可シ

第百三十七條ノ刑法第百三十七條ノ規則ニ循ヒ十五

第百三十七條ノ刑法第百三十七條ノ規則ニ循ヒ十五

同月廿九日布告

第百三十七條ノ刑法第百三十七條ノ規則ニ循ヒ十五

第百三十七條ノ刑法第百三十七條ノ規則ニ循ヒ十五

刑ヲ以テ罰ス可キ罪犯ヲ註誤違背ノ罪

十着做ス可シ但シ差押ハタル物件ヲ官ニ没収スルノ有無ト其物件ノ價ノ多少トヲ論ス

千八百七十三年
二月三日改正

ル丁ナシ
芽百三十八條○註誤ノ罪ハ後ノ教條ニ記スル
所ノ規則ト差別トニ循ヒ治安裁判役下等裁
判所ノ裁判及ヒメイ止之ヲ裁判ス可シ
役ヲ云フ

芽一欸○治安裁判役註誤罪ノ裁判ヲ
為ス事

○芽百三十九條○左ノ諸件ハ治安裁判役ノミ之

ヲ裁判ス可キ特權アリ權ナキハ其

○芽一〇〇カシトシノ首邑タルゴムミユ一ニ内

ニテ犯シタル註誤

千八百七十三年
二月二日改正

○芽二〇〇カントシノ首邑ニ非サルルゴムミユ

ニ非テ犯シタル註誤但シ犯人其ゴム

ミトシ内ニ住居セサル時又ハ証人其ゴム

ムミユトシ内ニ住居セサル時ニ限ル可ク

犯人現ニ註誤ノ罪ヲ行ヒ召捕ヘラレタ

ル時ハ別段ナリトス芽百六十六條見合

芽三〇註誤ノ罪犯ノ為ノ損害ヲ受ケシ者

高ノ定マラサル償又ハ十五フランク以

上ノ償ヲ得ント要ムル場合

芽四〇平民ハ申立ニ因リ訴フル「ミ」ニ「ビ」

千七百七十三年
二月三十日
庶人

所ノ森林ニ管ニタル註誤

茅五〇言詞ヲ以テ人ニ不放ヲ加ヘタル罪

註誤ノ時

茅六〇風俗ヲ亂ル可キ書画ヲ貼附シ又ハ

公布シ又ハ賣拂ヒ又ハ配分スル罪註誤

ニ限

茅七〇ト筮又ハ占夢ヲ業ト為スノ罪

茅百四十條〇又治安裁判役ハ前條ニ記シタル

所ノ外自己ノ管轄地内ニテ犯シタル總テノ

註誤ヲ「イ」止ト同シク裁判スルノ權アリ

六十六
條見合

茅百四十一條〇治安裁判役一員ノミナリタル地内

トニテ於テハ其裁判役一人ニテ註誤裁判

ノ事務ヲ取行フ可シ又治安裁判所ノ書記官

及ヒ門監ハ註誤裁判所ノ書記官及ヒ門監ノ

職ヲ兼ヌ可シ

茅百四十二條〇治安裁判役二員以上アル地ニ

於テハ其中ノ最モ先キニ任ヲ得タル者ヲ以

テ初メトシテ次ヲ以テ順序ヲ逐ニ交代シテ註誤

裁判役ノ職ヲ行フ可シ但シ此場合ニ於テハ

註誤裁判所ノ書記官一員ヲ別段定ム可シ
第百四十三條○又前條ノ場合ニ於テハ註誤裁
判所ヲ分テ二局ト為シ治安裁判役一員各其
局ノ事務ヲ掌ルヲ得可シ但シ此場合ニ於
テハ書記官ノ補役トシテ書記一員ヲ任スル
ヲ得可シ

第百四十四條○註誤裁判所ノフニステールビ
ブリックノ職務ハ其裁判所所在ノ地ノ邏卒長
之ヲ行フ可シ若シ邏卒長ニ差支アル時又ハ
其地ニ邏卒長ノアラサル時ハメイル又ハ其

輔佐之ニ代テ「ニステールビブリック」ノ職ヲ

行フ可シ其出外又ハ言動ノ前ハ

又邏卒長數人アル時ハ上等裁判所ノ「ロキユ

ルールゼ子ラル」ノ命ニテ其數人中「ニステ

ールビブリック」ノ職ヲ行フ可キ者ヲ定ム可シ

第百四十五條○註誤ノ罪ヲ犯シタルニ付テハ

呼出ハ「ニステールビブリック」ノ求メ又ハ其

註誤ノ為メ損害ヲ受ケタル者ノ求メニテ之

ヲ為ス可シ

其呼出狀ハ門監之ヲ送達シ被告人又ハ被告

人ノ為メ責ニ任ス可キ者民法第千三百二十四條見合其呼出状ノ寫ヲ渡シ置ク可シ

第百四十六條○其呼出状ニハ被告人二十四時間ニ出席ス可キヲ記ス可ク又遠キ地ニアル時ハ三ツエリアマトルニ付キ一日ノ猶豫ヲ増ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其呼出状ノ効ナク且被告人ヲ抗傳者ナリトシテ裁判言渡ヲ為ストモ其言渡ノ効ナカル可シ○但シ被告人其呼出状又ハ言渡ヲ取消サントスルニハ出席ノ上他事ヲ弁論シ又ハ訴ヲ拒ム

憑據ヲ述フル前ニ先ツ其取消ヲ得ント求ム

然レハ極メテ急迫ノ場合ニ於テハ出席ノ期限ヲ更ニ短カフシ治安裁判後ヨリ渡シタル別段ハ呼出状ニ其日ノ中何時ニ出席ス可キヤヲ記スルヲ得可シ

第百四十七條○又原告及ヒ被告ハ別段呼出状ノ送達ヲ受クルトナク唯出席ヲ為ス可キノ報告書治安裁判後ヲ得タルノミテ出席ス

第四百十八條○治安裁判後ハトミニステールビ

パルクノ求メニ因リ又ハ民事原告人ノ求メ

ニ因リ吟味ノ日ニ至ラサル前ニ誣誤ノ罪ノ

為人受ゲタル損害ノ高ヲ自カラ見積リテ其

調書ヲ記シ又ハ鑑定人ヲシテ之ヲ見積ラシ

メタル上其調書ヲ記サシメ又ハ其他急速ニ

為ス可キ處置ヲ自カラ為シ又ハ他人ヲシテ

為サシムルヲ言渡スヲ得可シ

第四百十九條○若シ被告人呼出状ニ記シタル

日時ニ出席セサル時ハ抗傳者ナリトシテ言

渡ヲ受ケ可シ

第五百十條○抗傳シテ言渡ヲ受ケタル者後條

ニ記スル吟味ノ日ニ出席セサル時ハ其言渡

ニ付キ故障ヲ述ハタルノ効ナカル可

シ但シ控訴並ニ復審院ヘノ上告ニ付キ後ニ

記スル所ハ格別ナリトス第四百七十四條見合セ

第五百十一條○被告人抗傳シテ受ケタル言渡

ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ其言渡書ノ

答詞トシテ其書ノ末ニ其旨ヲ附記シ又ハ其

言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ三日内ニ其故障

申立書ヲ届ク可シ但シ三「シリア」トシ毎
一日ノ猶豫ノ加フ可シ
其故障ヲ申立タル時ハ其申立人期限第百四十六條
ニ記スル終リニ後最初ノ吟味ノ日ニ出席ス
可ク若シ其日ニ出席セサル時ハ其故障申立
ノ効ナカル可シ
第百五十二條〇呼出ヲ受ケタル者ハ自身出席
シ又ハ名代人ヲ差出ス可シ
第百五十三條〇吟味ハ公ケニ之ヲ為ス可ク若
シ然ラサル時ハ其吟味ノ効ナカル可シ

其吟味ノ手續ノ為ス順序ハ左ノ如シ
調書アル時ハ書記官之ヲ読上ル事
証人ヲ呼出シタル時ハ其証人ノ申述ヲ聴
ク事次ニ民事ノ原告人其求ムル所ヲ定ム
ル事
被告人答辯ヲ為ス事并ニ後條ニ記スル所
ニ循ヒ証人ノ申述ヲ以テ証ト為シ得可キ
場合ニ於テ其証人ヲ呼出シタル時ハ其証
人ノ申述ヲ聴ク事

○
ミニステールロムブリツシ其罪犯ノ事件ヲ簡
畧ニ書面ニ記シ且其求ムル所ヲ定ムル書
面ヲ差出ス事次ニ呼出ラ受ケタル者此事
ニ付キ自己ノ意ヲ述フル事

註誤裁判所ニテ吟味ノ手續終リタル日ニ
直ニニ裁判ヲ言渡ス事又ハ遅クトモ次ノ
吟味ノ日ニ其裁判ヲ言渡ス事

第百五十四條○註誤ノ罪犯ハ調書又ハ申立書
ヨリ法警察官吏
ノ記シタル書ヲ以テ之ヲ証シ又其調書及
申立書ノアラサル時ハ証人ヲ以テ之ヲ証シ

又其書アル時ト雖モ其書ニ記スル所ヲ更ニ
確的ナラシムル為メ証人ヲ以テ之ヲ証ス可
シ
何人ニ限ラス法律上ニテ罪犯ノ証ヲ立ル權
ヲ任セラレシ警察官吏ノ記シタル調書又ハ
申立書實造ノ新アル確ニ反シタル事件
又ハ此等ノ書面ニ記シタル以外ノ事件ヲ証
人ヲ以テ証セシムルヲ得ス若シ証人ヲ以
テ其証ヲ立テシメタルト雖モ其効ナカル可
シ○又贋造ノ訴アル迄ハ其書面ヲ確的ノモ

ノト為ス可キ權ヲ法律上ニ任セテレサル
官吏ノ記シタル調書又ハ申立書ニ付テハ裁
判所ノ允許ヲ得タル上ニテ證書又ハ証人ヲ
以テ之ニ反シタル証ヲ立ルヲ得可シ
第百五十五條○証人ハ吟味ノ席ニテ必ス正實
ヲ述ヘ正實ノ外述ヘサル可キノ誓ヲ為ス可
シ若シ其誓ヲ為サスニテ証ヲ述ヘタル時ハ
其効ナカル可シ但シ書記官ハ証人ノ為シタ
ル誓ノ旨ト其姓名、年齢、職業在所ト其申述ル
所ノ中重立タル箇條トヲ書取ル可シ

○ 第百五十六條○ 被告人、尊屬及ヒ卑屬、親其

血屬及ヒ姻屬、兄弟姉妹、並ニ既ニ離婚トナ
リタルト雖モ其配偶者ハ証人トシテ呼出ス
可カラス又其述フル所ノ証ヲ聴取ル可カラ
ス然レモ「ニ」ニステール「ユ」バリック「シ」民事ノ原告
人被告人皆此條ニ記列スル者ノ述フル所ヲ
聴クニ付キ故障ヲ述ヘサル時ハ此等ノ者ノ
述ヘタル証ヲ聴取リタルト雖モ之ヲ取消ス
可カラス

第百五十七條○ 証人呼出ラ受ケテ出席ヲ為サ

時ハ裁判所ナリトニニステールビュブリッ
ノ末メニ從ヒ吟味ノ席ニテ罰金ヲ言渡シ又
再度ノ呼出ラ受ケ猶出席セサル時ハ裁判所
ヨリ其証人ヲ召捕フ可キ旨ヲ言渡ス可シ

第百五十八條○初メ出席ヲ為サハルニ付キ罰
金ヲ言渡サレシ証人再度ノ呼出ニ從ヒ出席
シタル上初メ出席セサルニ付キ正當ノ理ア
ルコトヲ辨解シタル時ハ罰金ニステールビュブリッ
クノ申立ニ從ヒ罰金ヲ免ルコトヲ得可シ
若シ初メ出席ヲ為サスシテ罰金ヲ言渡サレ

タル証人再度呼出ラ受ケサル時ハ次ノ吟味
ノ日ニ自身出席シ又ハ名代人ヲ差出し初メ
出席セサリシ事由ヲ辨解シ正當ノ理アル時
ハ罰金ヲ免ルコトヲ得可シ

第百五十九條○若シ被告人ノ申立テラレタル
所為重罪ニモ輕罪ニモ非サル時ハ裁判所ニ
テ其呼出状並ニ其呼出後為シタル諸件ヲ取
消シ且損失ノ償被_{告人}求ムル所ヲ言渡ス可シ
第百六十條○若シ被告人ノ申立テラレタル所
為懲治刑_{輕罪ヲ罰}以上ニ處ス可キモノタル

時ハ裁判所ヨリ原告被告ヲシテ「アロキユ」
テ「アンベリ」ア止ノ「面」前ニ出テシム可シ

第百六十一條○被告ノ申立テラレタル所為
註誤タルノ証アル時ハ註誤裁判所ヨリ相當
ノ刑ト取戻及ヒ損害ノ償トシテ言渡ス可シ

第百六十二條○負訴訟ノ者ハ其相手方ノ裁判
費用ヲ償ヒ又刑事ノ原告人即チ「ヨニス」テ「ト」
ル「ビ」グ「リ」ツノ
費用ヲモ償フ可シ

其費用ノ高ハ裁判所ニテ定ム可シ
第百六十三條○犯人ヲ刑ニ處スル言渡書ニハ

其言渡ヲ為スニ付テハ道理ヲ記シ且其刑ニ
管シタル刑法ノ箇條ヲ記ス可シ若シ此等ノ
事ヲ記セサル時ハ其言渡書ノ効ナカル可シ
又其言渡書ニハ終審ノ裁判タルヤ又ハ始審
ノ裁判タルヤヲ記ス可シ

第百六十四條○裁判言渡書ノ正本ニハ吟味ヲ
為シタル裁判役邊ク「ト」モ二十四時間ニ姓名
ヲ手署ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ書記官
二十五「フラン」シノ罰金ヲ言渡サレ又別段ノ
道理アル時ハ裁判役並ニ書記官損害ノ償ヲ

為ス可キノ訴ヲ受ク可シ百五條見合

第百六十五條〇司法官ニテハ各自己ニ管シタル事ニ付キ裁判言渡ノ如ク執行フノ手續ヲ為ス可シ

第二款〇司法官ハ其職ヲ為ス事

第百六十六條〇司法官トシテ首邑ニ非サルコトハ其職ヲ為ス可シ
行ヒタル誣誤ノ罪ヲ治安裁判役ト同シク裁判シ又証人其職ニ在リテハ其職ヲ為ス可シ

千八百七十三年
二月三日第百七十
一條迄廢ス

原告人ノ償ヲ得ル事ト求ムル高キ五ノ一ヲ過キサル時ハ其職ニ在リテハ其職ヲ為ス可シ
ノ犯シタル誣誤ノ罪ヲ治安裁判役ト同シク裁判ス可シ

〇司法官ハ第百三十九條ニ循ヒ治安裁判役ノ職ヲ為ス可キ誣誤ヲ裁判ス可カラズ又治安裁判役ノ民事ニ付キ裁判ス可キ事件ヲ裁判ス可カラズ

第百六十七條〇司法官ハ其職ヲ為ス時ハ其輔佐ニテハ其職ヲ行フ可

若シ其輔佐アラザル時、又ハ其輔佐「メイ」ニ
ニ代テ誣誤裁判ノ職ヲ行フ時ハ「コム」ニ
ノ會議員中ニテ「ア」ロキユール「アム」ペリアル
ノ一年間換用シタル者「シ」ニス「テール」ビユブリッ
クノ職ヲ行フ可シ

第百六十八條○誣誤裁判ノ事ニ付キ「メイ」ニ
書記官ノ職務ハ「メイ」ニノ撰ミタル者「平民」之
ヲ行フ可シ、但シ其者ハ輕罪裁判所ニ於テ誓
ヲ為ス可シ○其者ハ書類ヲ寫取ルニ付キ、治
安裁判役ノ書記官ニ等シキ謝金ヲ受ク可シ

第百六十九條○呼出狀ヲ送達スルニハ必スレ
モ門監ヲ托スルニ及ハス、又其呼出ハ「メイ」ニ
ヨリ送リタル報告書ヲ以テ為ス「得」可シ、
但シ其報告書ニハ、被告人ノ申立テラレタル
所為、其出席ス可キ日時トヲ記ス可シ

第百七十條○又証人ヲ呼出スニ付テモ、前条ニ
等シク、唯其証ヲ聴ク可キ日時ヲ記シタル報
告書ヲ以テ之ヲ呼出ス「得」可シ
第百七十一條○「メイ」ニハ「コム」ニ「ユ」トシノ役所ニ
於テ裁判ノ席ヲ開キ、原告被告並ニ証人ヲ公

ケニ吟味ス可シ

其他治安裁判役ノ吟味ノ手續及ヒ裁判言渡
ニ付キ才百四十九条才百五十条才百五十一
条才百五十三条才百五十四条才百五十五条
才百五十六条才百五十七条才百五十八条才
百五十九条才百六十条ニ記スル所ノ規則ス
ルノ為ス可キ吟味ノ手續及ヒ裁判言渡
ニモ亦通シテ用フ可シ

第百六十条ノ事
第三款ノ註誤ノ裁判言渡ヲ控訴スル

第百七十二條ノ註誤ノ裁判ニテ禁錮ヲ言渡シ

又ハ裁判所費用ヲ除ク外五フレンク以上

ノ罰金及ヒ償還ヲ言渡ス時ハ其言渡ヲ控訴

スルヲ得可シ

第百七十三條ノ註誤ノ裁判言渡ヲ控訴シタル

時ハ其言渡ノ執行ヲ暫ク止ム可シ

第百七十四條ノ註誤裁判所ノ言渡ハ輕罪裁判

所ニ控訴ス可シ此控訴ハ員訴訟ノ者又ハ其

住所ニ言渡書ヲ送達シタルヨリ十日内ニ之

ヲ為ス可シ但シ其控訴ヲ為シタルヨリ裁判

ニ至ル迄ノ法式ハ治安裁判役ノ言渡ヲ控訴
シタル時ト同一ナリトス訴訟法第百四
條見合

第百七十五條。控訴ヲ為シタル上ニテ「プロキエ
リエールアムヤリアム」又ハ民事ノ原告人或ハ
被告人ノ求メニ從ヒ再ヒ証人ノ述フル所ヲ
聴キ又ハ更ニ他ノ証人ノ述フル所ヲ聴ク
ヲ得可シ

第百七十六條。吟味手續ノ法式証拠ノ種類裁
判言渡書ノ法式其言渡書ニ姓名ヲ手署スル
事裁判費用ヲ出ス可キ言渡ヲ為ス事並ニ

刑罰ヲ言渡ス可キ事等ノ諸事ニ付キ前數條
ニ記シタル規則ハ控訴ノ上輕罪裁判所ニテ
為^ス所ノ言渡ニモ亦通シテ之ヲ用フ可シ

第百七十七條。第一ニステールルビエブリック及ヒ民
事ノ原告人並ニ被告人ハ註誤裁判所ニ終審
ノ裁判言渡又ハ控訴ノ上輕罪裁判所ニテ為
シタル裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ上告
スルヲ得可シ

其上告ハ別段定メタル法式ト期限トニ循
之ヲ為ス可シ第三百七十三
條以下見合

千七百三十三年二月二日
ノルラテ
○

第百七十八條。三ヶ月ノ期限即チ註誤裁判所
開キ置ク定期ノ

初メ毎ニ治安裁判役及ヒ「ノイ」ヨリ前三ヶ月

ノ期限間註誤ノ罪犯ニ付キ禁錮ヲ言渡シタ

ル裁判言渡書ノ後書ヲ「プロキエリ」ム

リ「ム」ニ送ル可シ。其後書ハ書記官無税ニ

テ之ヲ渡ス可シ。

「プロキエリ」ム「ム」ハ其後書ヲ輕罪

裁判所ノ書記局ニ納ム可シ。

簡畧ニ為シテ之ヲ上等裁判所ノ「プロキエリ」

ルセ子テ「ル」ニ出ス可シ。

第二章ノ輕罪裁判所ノ事即チ懲治
刑裁判所

第百七十九條ノ民事ニ付テノ下等裁判所即チ

ルロニ「チ」ス「ム」ニ毎ハ輕罪裁判所ノ名義ヲ以

ニ設ケタルモ「官」ニ属スル森林ニ管シタル罪輕罪並ニ註
誤ヲ云フ

及七五日以上ノ禁錮又ハ十五「ラ」ン以上

ノ罰金ヲ言渡ス可キ總テノ輕罪ヲ裁判ス可

シ。

第百八十條ノ輕罪裁判所ニテハ裁判役三員以

上ニテ裁判ヲ言渡ス可シ。

第百八十一條の若し輕罪裁判所ニテ吟味ヲ為
ス時間其裁判所ノ郭内ニ於テ輕罪ヲ犯ス者
アル時ハ其上席人其罪犯ヲ調書ニ記シテ其
犯人及ヒ証人ノ申述ヲ聽キ直チニ法律上ニ
テ定マリタル刑ヲ言渡ス可シ
又重罪裁判所ニテ吟味ヲ為ス時間又ハ民法
裁判所ニテ吟味ヲ為ス時間其郭内ニテ輕罪
ヲ犯ス者アル時ハ亦此條ニ記スル所ノ規則
ヲ通シ用ス可シ但シ此條ニ記スル言渡ハ之
ニ控訴スルトテ得可シ

第百八十二條○輕罪裁判所ハ第百三十條及ヒ
第百六十條ニ記スル所ニ循ヒ輕罪ノ吟味ニ
取掛リ又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人又ハ被
告人ノ為メ責ニ任ス可キ者ニ直ニ為シタル
呼出ニ因リ其吟味ニ取掛リ又森林ニ管シタ
ル罪犯ニ付テハ森林ノ支配人森林ノ監察監
察ノ補役及ヒ看守人ノ訴ニ因リ其吟味ニ取
掛リ又如何ナル場合ニ於テモゴブ口キリル
アシムベリアルノ求メニ因リ其吟味ニ取掛ル
可シ

第百八十三條 ○民事ノ原告人ハ被告人一ノ呼
出状ニ裁判所所在ノ地ニ別段住所ヲ擇ミタ
ル旨ヲ附記ス可シ又其呼出状ニハ被告人ノ
犯シタルトスル罪犯ヲ記ス可シ但シ其呼出
状ハ犯罪申立書ト同視ス可シ

第百八十四條 ○呼出状ヲ送達シタルト裁判言
渡トノ間少クトモ三日ノ猶豫アル可クシテ
被告人遠キ地ニ住スル時ハ三ツミリアメト
出毎ニ更ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ若シ此規
則ニ背キ被告又ヲ抗傳者十割ニシテ裁判ヲ

言渡スニアリトモ其言渡ノ効ナカル可シ
然レハ被告人其言渡ヲ取消サントスルニハ
次ニ出席シタル時他事ヲ辯論シ又ハ訴ヲ拒
ム馮憑據ヲ述フル前ニ先ツ其取消ヲ得ント求
ム可シ

第百八十五條 ○禁錮以下ノ刑ニ處ス可キ輕罪
ノ時ハ被告人其名代トシテ代書師ヲ差出ス
ト得可シ然レハ裁判所ニテ其時ノ模様ニ
循ヒ本人自カラ出席ス可キトテ言渡スヲ得
可シ

△ 第百八十六條○若シ被告人出席セザル時ハ抗
傳ノ後裁判言渡ヲ受ク可シ

第百八十七條○(千八百六十六年第百六十六條六月廿七日
左ノ如ク改ム)被告人ニ抗傳ノ後裁判言渡ヲ
為シ其言渡書ヲ被告人又ハ其任所ニ送達シ
タルヨリ五日内ニ其被告人其裁判言渡ヲ抗
行ニ付キ故障ヲ述ヘ且ヨニスニテールピユア
リツト民事ノ原告人トシ其故障申述書ヲ送
リタル時ハ其裁判言渡ヲ取消ス可シ但シ被
告人遠キ地ニ住スル時ハ五日ヨリヤメトトル

○ 毎ニ五箇ノ期限ニ一日ノ猶豫ヲ和フ可シ
其裁判言渡書ヲ寫シテ之ヲ送達スル費用及
ヒ故障申述書ヲ送達スル費用ハ抗傳シタル
被告人ノ別受タル可シ
然レモ其裁判言渡書ヲ現ニ其被告人ニ届ケ
ス又ハ其裁判言渡ヲ執行フタル時ノ模様ニ
因リ被告人其執行ヲ知ラサル可シト思料ス
可キ時ハ其被告人刑ノプロレスクリションノ
期限ニ至ル迄其故障ヲ申述フルヲ得可シ
第百八十八條○抗傳シタル被告人裁判言渡ニ

付キ故障ヲ申述ヘタル時ハ次ノ吟味ノ日ニ
出席ス可キ呼出ヲ受ケタルト同視ス可クニ
テ若シ次ノ吟味ノ日ニ出席セサル時ハ其故
障申述ノ効ナカル可シ然ル上ハ其故障ヲ申
述ヘタル者控訴ヲ為スニ非サレハ其裁判言
渡ヲ取消サント求ム可カラズ
此場合ニ於テ別段ノ道理アル時ハ裁判所ヨ
リ假リニ其裁判言渡ノ如ク執行ヲ可キノ言
渡ヲ為スコトヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ相
手方控訴ヲ為スニ當セズ其裁判言渡ノ如ク

執行ノ可シ
第百八十九條〇(千八百九十六年第六月十三日
左ノ如ク改メ輕罪犯罪ノ証ヲ得ル方法ニ註
誤ノ証ニ付キ第百五十四條第百五十五條第
百五十六條ニ記シタル所ヲ等シトス〇書記
官ハ証人ノ申述ニ並ニ被告人ノ答辯ヲ覺書ニ
記ス可シ〇其覺書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ
上席人シニ檢印ス可シ〇第百五十七條第百
五十八條第百五十九條第百六十條第百六十
一條ノ規則ハ輕罪ノ場合ニモ適用ヲ可シ

△

第百九十條の吟味ハ公ケニ為ス可シ若シ公ケ
ニ為ササル時ハ其効ナカル可シ
刑口キユリユトルアムペリアル、民事ノ原告人又
ハ其代言人又森林ニ管シタル罪犯ニ付テハ
木林ノ支配人、森林ノ監察又ハ其補役若シ其
アテサル時ハ森林ノ監守人罪犯ノ模様ヲ辨
明シ調書又ハ申立書アル時ハ書記官之ヲ読
上ケ又双方証人ノ述フル所ヲ聞糺シ一方ノ
者証人ニ付キ故障ヲ述ベシトスル時ハ之ヲ
述ベシトス裁判ヲ為シ且有罪ノ証又ハ無罪

ノ証書類ヲ証人ト双方ト示シ被告人ノ向
糺シテ被告人及ビ被告人ノ為メ責ニ任ス可
キ若其答辨ヲ為シテプロキユリユトルアムペリア
ル其罪犯ノ條件ヲ簡畧ニ書面ニ記シテ其求
ムル所ヲ足メ被告人及ビ被告人ノ為メ責ニ
任ス可キ若之ニ答フルヲ得可シ
其後直チニ裁判ヲ言渡シ又ハ違クトモ次ノ
吟味ノ日ニ其裁判ヲ言渡ス可シ
第百九十一條○若シ被告人ノ申立テラレタル
所為輕罪ニモ誣誤ニモ依ルサレ時ハ裁判所ニ

テ呼出状及ヒ吟味ノ手續並ニ其他ノ諸件ヲ
取消シテ被告入ヲ赦免シテ其損失ノ償ヲ言
渡ス可シ得ル所ノ

第百九十二條○若シ被告人ノ申立テラレタル
所為誣誤ナル時刑事ノ原告人及ヒ民事ノ原
告人ヨリ誣誤裁判所ニ其吟味ヲ移スヲ求
メサル時ハ輕罪裁判所ニテ相當ノ刑ヲ言渡
シ且損害ノ償ヲモ言渡ス可シ
此場合ニ於テハ輕罪裁判所ノ裁判言渡ヲ終
審ノモトトス可シ

第百九十三條○若シ被告人ノ申立テラレタル
所為施体又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キ罪重罪ヲ
ナル時ハ輕罪裁判所ヨリ直ニ禁錮状又ハ
収監状ヲ出シ其被告人ヲシテ管轄ノ下吟味
掛リ裁判役ノ面前ニ出テシム可シ
第百九十四條○被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ
任ス可キ者負訴訟トナリ又ハ民事ノ原告人
負訴訟トナル時ハ相手方ノ裁判費用ヲ償ヒ
且刑事ノ原告人ノ裁判費用モ亦償フ可シ
其費用高シ裁判言渡書ニ之ヲ定ム可シ

第百九十五條○裁判言渡書ニハ、呼出サレタル者ハ犯シタル罪又ハ其責ニ任テ不可キ條件ヲ記シテ、且其刑ノ言渡、及ヒ民事上ノ言渡ヲ記ス可シ、

其罪ニ付キ言渡セシ刑ニ管シタル刑法ノ箇條ハ、上席人吟味ノ席ニテ之ヲ讀上ケ、裁判言渡書ニ其讀上ヲ為シタル旨ヲ附記シテ、且其讀上ケタル刑法ノ箇條ヲ記入ス可シ、若シ書記官此規則ニ背ク時ハ、五十分ラニシテ又罰金ヲ言渡サレ可シ、

第百九十六條○裁判言渡書ノ正本ニハ、之ニ管

スル裁判役、譯クトモ二十四時間ニ姓名ヲ

署名ス可シ、

若シ裁判役姓名ヲ予署セサル内ニ書記官其言渡書ノ寫ヲ渡ス時ハ、贋造者タルノ訴ヲ受

ク可シ、

テ口書リルアマムベリアルハ、毎月裁判言渡

書ノ正本ヲ受取テ、之ヲ檢視シ、若シ此條ノ規

則ニ背ク事アル時ハ、相當ノ處置ヲ為スニ付

テ、調書ヲ記ス可シ、

○
第百九十七條 ○アロキリトルアムベリアル及
民事ノ原告人ハ各自己ニ管スル事ニ付テ
裁判言渡ノ執行ヲ求ム可シ
然レモ罰金ヲ取立テ及ヒ罪犯ニ管シタル物件
ヲ官ニ没収スルノ手續ハ記録稅役所ノ支配
人アロキリトルアムベリアルノ名目ヲ以テ
之ヲ為ス可シ
第百九十八條 ○アロキリトルアムベリアルハ
裁判言渡ヨリ十五日内ニ其拔書上ニ等裁判
所ノアロキリトルアムベリアル送ル可シ

△

第百九十九條 ○輕罪ニ管シタル裁判言渡ハ控
訴ヲ為シテ之ヲ取消サント求ムルコトヲ得可
シ

第二百條 ○千八百五十六年第百六月十三日廢止

第百零一條 ○千八百五十六年第百六月十三日左

ノ如ク改シ輕罪ニ管スル裁判言渡ハ上等裁
判所ニ控訴ス可シ

第百零二條 ○千八百五十六年第百六月十三日左

ノ如ク改シ左ノ各人ハ控訴ヲ為スコトヲ得可
シ

シ

芽一〇被告人、又ハ被告人ノ為メニ責ニ任
ス可キ者

芽二〇民事ノ原告人、但シ民事ニシテ限ル
可シ

芽三〇官ノ森林ニ管シタル官吏

芽四〇「アロキユール」アム「リア」止

芽五〇上等裁判所「アロキユール」ゼ子ラ

止

芽二百三條〇裁判言渡ノ日ヨリ遅クトモ十日
内ニ其言渡ヲ為シタル裁判所ノ書記局ニ控

訴ヲ為ス旨ヲ届ケ、又抗傳ニテ言渡ヲ受ケタ
ル時ハ其言渡ヲ受ケタル者又ハ其住所ニ其
言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ遅クトモ十日
内ニ同上ノ旨ヲ届ケルニ非サレハ芽二百五
條ニ記スル所ヲ除クノ外控訴ヲ為スノ權ヲ
失フ可シ、但シ抗傳者ノ住所遠キ時ハ三「メ」リ
ア「メ」ト「止」毎ニ其十日ノ期限ニ一日ノ猶預
ヲ加フ可シ、
此期限ノ間ト控訴ノ上吟味ヲ受クル間トニ
於テハ、輕罪裁判所ノ言渡ヲ執行フ「メ」ヲ暫ク

此等可也
第百四條〇千八百五十六年第六月十三日左
ノ如ク改之控訴ヲ為スニ付テノ憑據ヲ記シ
タル願書又前條ニ記スル期限内ニ全上ノ書
記弓ニ納ム可シ但シ其願書ハ控訴人又ハ代
書師又ハ其他ノ名代人之ニ姓名ヲ予署ス可
シ
名代人其願書ニ姓名ヲ予署シタル時ハ本人
ヨリ名代ノ權ヲ授ケタル証書又其願書ニ添
ハ差出ス可シ

又其願書ハ直テニ上等裁判所ノ書記弓ニ差
出スヲ得可シ
第二百五條〇千八百五十六年第六月十三日左
ノ如ク改之上等裁判所ノ「パロキュール」セ子
ラハ輕罪裁判所ノ言渡ノ日ヨリ二月内ニ
被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ任ス可キ者ニ
控訴書ヲ送り又「パロキュール」セ子ラハ法式
ニ循ヒ此等ノ者ヨリ輕罪裁判所ノ言渡書ノ
送達ヲ得タル時ハ其送達ヲ得タル時ヨリ一
月内ニ此等ノ者ニ控訴書ヲ送ル可シ然ラサ

レハ、ハ、ア、ロ、キ、ユ、リ、ユ、ール、ゼ、子、ラ、ル、其、控、訴、ノ、権、ヲ、失
フ、可、シ

第二百六條〇(千八百六十五年第七月十四日左
ノ如ク改ム被告ノ無罪タルノ言渡ヲ得タル
時ハ、控、訴、ニ、管、セ、ス、直、テ、ニ、之、ヲ、赦、宥、ス、可、シ

第二百七條〇(千八百五十六年第六月十三日左
ノ如ク改ム控訴ノ憑據ヲ記シタル願書ヲ輕
罪裁判所ノ書記局ニ差出シタル時ハ、ア、ロ、キ、ユ、リ、ユ、ール、ア、ム、ペ、リ、ア、ル、其、願、書、ト、總、テ、ノ、書、類、ト
夫、控、訴、ノ、届、又、ハ、控、訴、書、ノ、送、達、ヨ、リ、二、十、四、時

間ニ、上、等、裁、判、所、ノ、書、記、局、ニ、送、ル、可、シ、一、月、内
輕罪裁判所ニテ刑ヲ言渡サレシ被告人既ニ
獄舎附ノ裁判所ニアル時ハ、ア、ロ、キ、ユ、リ、ユ、ール、ア、ム、ペ
リアルノ言附ニテ、全、上、ノ、期、限、間、ニ、之、ヲ、上、等
裁判所所在ノ地ノ獄舎ニ移ス可シ

第二百八條〇(千八百五十六年第六月十三日左
ノ如ク改ム控訴ヲ為シタル上、一、方、ノ、者、抗、傳
シテ受ケタル裁判言渡ハ、輕、罪、裁、判、所、ニ、テ、一
方抗傳シテ受ケタル言渡ニ付キ故障ヲ述フ
ルト同一ノ法式及ヒ期限ニ從ヒ、其、故、障、ヲ、述

フルトヲ得可シ
其故障ヲ述タル時ハ次ノ吟味ヲ日ニ出席
ス可キ呼出ヲ受ケタルト同視シ若シ其故障
ヲ述ヘタル者次ノ吟味ノ日ニ出席セサル時
ハ其故障申述ノ効ナカル可シ○故障ノ申述
ニ付キ受ケタル裁判言渡ハ其故障ヲ述ヘタ
ル者覆審院ニ上告スルニ非サレハ其取消ヲ
訴フ可カラス

第二百九條○(千八百五十六年第六月十三日左
如ク改ム)控訴ハ之ヲ為シタルヨリ一月内

ニ上等裁判所ノ裁判後一頁ノ申立ノ上公文
ノ吟味ノ席ニテ之ヲ裁判ス可シ

第二百十條○(千八百五十六年第六月十三日左

如ク改ム)掛リ裁判後即テ前條ニ記ノ申立
ヲ為シタル上其裁判後並ニ他ノ裁判後未タ
其説ヲ述サル内嘗テ輕罪裁判所ニテ無罪ノ
言渡ヲ得タルト刑ノ言渡ヲ受ケタルトテ問
ハス被告ト被告人ノ為ノ責ニ任ス可キ者民
事ノ原告人トプロキュールセラルル弟百九十
條ニ記シタル法式ト順序トニ循ヒ其申述ヲ

為ス可シ

第二百一十一條〇(千八百五十六年第六月十三日)

左ノ如ク改ム吟味手續ノ法式、証據ノ種類、裁

判言渡書ノ法式、其言渡書ニ姓名ヲ手署スル

事、裁判費用ヲ出ス可キノ言渡ヲ為ス事、並ニ

刑罰ヲ言渡ス可キ事等ノ諸事ニ付キ、前數條

ニ記シタル規則ハ、控訴ニ付キ為シタル裁判

言渡ニモ亦通シテ用テ可シ、第六月十三日

第二百一十二條〇(千八百五十六年第六月十三日)

左ノ如ク改ム)被告人ノ申立テラレタル所為

輕罪ニモ註誤ニモ非サルニ因リ、控訴ノ上、輕

罪裁判所ノ言渡ヲ更改スル時、上等裁判所

ニテ、被告人ヲ赦宥シ、別段ノ道理アル時、損

失ノ償ヲ言渡ス可シ

第二百一十三條〇(千八百五十六年第六月十三日)

左ノ如ク改ム)被告人ノ申立テラレタル所為

註誤ナルニ付キ、輕罪裁判所ノ言渡ヲ取消ス

時、刑事ノ原告人及ヒ民事ノ原告人註誤裁判

所ニ其吟味ヲ移ス可キヲ求メサルニ於テ

ハ、上等裁判所ニテ、相当ノ刑ヲ言渡シ、且別段

ノ道理アル時ハ損害ノ債ヲ言渡ス可シ
第二百十四條〇(千八百五十六年第六月十三日)
左ノ如ク改ム被告人ノ申立テラレタル所為
施体又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キニ因リ輕罪裁
判所ニ言渡ヲ取消ス時ハ上等裁判所ニテ禁
錮狀又ハ收監狀ヲ出シ其被告人ヲ相當ノ官
吏下吟味掛リ裁判役又ハプロキノ面前ニ至
ラシム可シ但シ既ニ其被告人ノ罪犯ニ付キ
言渡ヲ為シ又ハ下吟味ヲ為シタル官吏ノ面
前ニ至ラシム可カラス

第二百十五條〇(千八百五十六年第六月十三日)
左ノ如ク改ム輕罪裁判所、言渡法律ニテ必
要ナリト定メタル法式ニ違フタルニ因リ控
訴ノ上之ヲ取消ス時ハ上等裁判所ニテ其本
案ニ付キ裁判ヲ言渡ス可シ
第二百十六條〇(千八百五十六年第六月十三日)
左ノ如ク改ム民事ノ原告人、被告人、刑事ノ原
告人、被告人、為メ責ニ任ス可キ者ハ控訴ニ
付テ、上等裁判所ノ言渡ヲ取消サント覆審
院ニ上告スルヲ得可シ

更ニ五日以内ニ其申立ヲ為ス可シ
其期限間即テ十日ニ民事ノ原告人及ビ被告
人其相當ト思料スル所ノ覺書ヲ差出スルヲ
得可シ但シ之カ為メ「プロキユールゼ子ラル
」申立ヲ遲延スルヲナカル可シ

第二百十八條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改ム)上等裁判所中ニ別段一局即チ
重罪
取調ヲ設ケ置キ其上席人ノ言附ト「プロキユール
」ルゼ子ラルノ求トニ從ヒ其申立ヲ聽キ之
ヲ裁判ス可キ為メ其局中ノ裁判後會議ヲ為

ス可シ
「プロキユールゼ子ラル」ヨリ別段求メテ受テ
サレ時ト雖モ少クトモ毎週一度其會議ヲ為
ス可シ

第二百十九條〇(千八百五十六年第七月十七日
左ノ如ク改ム)上席人ハ「プロキユールゼ子ラ
ル」申立ヲ為シタル後直チニ重罪取調局ヲ
シテ其裁判ヲ為サシムルノ手續ヲ為ス可シ
若シ直チニ其裁判ヲ為スルヲ得サル時ハ遲
ク下モ三日以内ニ其裁判ヲ為ス可シ

○ 第二百二十條 ○ 若シ其事件最上等裁判所又ハ
覆審院ノ管轄タル可キ時ハ^{ホートゥール}プロキエリニナルゼ
子ラ止重罪取調局ニ其事件ヲ取調ヲ止メテ
之ヲ最上等裁判所又ハ覆審院ニ移ス可キ旨
ヲ求人重罪取調局ニテ其旨ヲ言渡ス可シ
第二百二十一條 ○ 前條ニ記シタル場合ノ外重
罪取調局ニテ被告人ノ所為法律上ニテ重罪
ト為ス可キモノタルハ^{エビダス}証又ハ^{エビダス}徵憑ナルヤ否
ヲ取調ヘ且其証又ハ徵憑ニ因リ被告人重罪
ヲ犯シタリト告ク可キノ言渡ヲ為ス可キヤ

否ヲ取調ノ可シ
第二百二十二條 ○ 書記官ハ^アプロキエリニルゼ子
ラ止ノ面前ニテ^ア訴ニ管シタル^ア総テノ書類ヲ
裁判役ニ讀ミ聞カセ其後其書類ト民事ノ原
告人並ニ被告人ヨリ差出シタル^ア覺書トモ皆
重罪取調局ニ納メ置ク可シ
第二百二十三條 ○ 民事ノ原告人被告人証人ハ
出席スルヲナカル可シ
第二百二十四條 ○ ^アプロキエリニルゼ子ラ止ハ其
姓名ヲ予署セシ求刑ノ書ヲ重罪取調局ニ納

メタル後書記官ト共ニ其席ヲ退ク可シ
第百二十五條○重罪取調局ノ裁判役ハ即時

ニ高議ス可ク其間他人ト詰ヲ参ユ可カラス

第百二十六條○重罪取調局ニテ取調ヲ為ス

重罪ニ附帯シタル罪犯ノ証書類其局ニアル

時ハ其重罪ト共ニ附帯ノ罪犯ヲモ亦取調

テ共ニ裁判ス可シ
重罪取調局ニテハ
ルト告ク可キヤ否

唯被告ノ重罪ヲ犯シタ

第百二十七條○数人組合テ同時ニ罪ヲ犯

シタル時又ハ日時ト場所ト共ニ異ナルト雖

凡數人申合せ罪ヲ犯シタル時又ハ犯人甲ノ

罪ヲ犯サントスル便ヲ得ル為メ乙ノ罪ヲ犯

シタル時又ハ甲ノ罪ヲ犯スラ容易ナラシム

ル為メ或ハ甲ノ罪ヲ為シ遂クル為メ或ハ甲

ノ罪ヲ犯シ其罰ヲ免ル、為メ乙ノ罪ヲ犯シ

附帯犯

第百二十八條○重罪取調局ニ於テハ別段ノ

道理アル時改メテ下吟味ヲ為ス可キヲ言

渡スヲ得可シ

又其局ニテ別段ノ道理アル時ハ輕罪裁判所

人書記局ニ納メタル罪犯ノ証書類ヲ差送ル
可キヲ言渡スヲ得可シ

此等ノ諸事ハ成ル可キ丈速ニ言渡ス可シ

第二百二十九條〇(千八百五十六年第七月十七

日左ノ如ク改シ若シ重罪取調局ニテ罪犯ノ

憑據ナシト思フ時又ハ其憑據アリト雖モ被

告人其罪ヲ犯シタルノ十分ナル証ナシト思

フ時ハ其被告人ヲ赦宥ス可キ旨ヲ言渡ス可

シ但シ被告人他ノ事故アリテ禁錮ヲ受ケタ

ル時人外ハ即時ニ其言渡ノ如ク執行フ可シ

下吟味掛リ裁判役被告人ヲ赦宥ス可キ旨ヲ

言渡し其言渡ニ付キ故障ヲ述フル者アリテ

重罪取調局ニテ之ヲ取調ヘタル上罪犯ノ証

ナシト思料スル時ハ重罪取調局ニテ下吟味

掛リ裁判役ノ言渡ヲ確的トナス旨ヲ言渡し

前項ニ記スル如ク即時ニ其言渡ノ如ク執行

フ可シ

第二百三十條〇(千八百五十六年第七月十七日

左ノ如ク改シ重罪取調局ニテ被告人ヲ誣誤

裁判所又ハ輕罪裁判所ニ移ス可シト思料ス

此時ハ之ヲ相當ノ裁判所ニ移ス_ト言渡ス
可_レ但_レ被告_人ヲ誣誤裁判所ニ移_レタル時
ハ之ヲ赦宥ス可_レス禁錮ヲ免ル

第二百三十一條〇(千八百五十六年第七月十七

日)九ノ如ク改_ム若_シ被告_人ノ罪法律上ニテ
重罪ナリト定_ムル所ニシテ且重罪ヲ犯_シタ
ルト告_{クル}ニ付キ十分ナル憑據アリト思料
スル時ハ重罪取調局ヨリ被告_人ヲ重罪裁判
所ニ移_スト_テ言渡ス可_レス即チ重罪ヲ犯_シタ
旨ヲ言渡
ス_ト

如何ナル場合ニ於テモ重罪取調局ニテハ下

吟味掛リ裁判役ノ言渡如何ナルヲ問ハス_カ

口キユ_ルルゼ子_ラルノ求_メニ從_ヒ其局ニ訴

ヲ移_シタル各被告_人ニ付キ其取調ニ因_リ知

リ得_可キ重罪輕罪誣誤ノ箇條ヲ裁断ス可_レス

罪ヲ犯_シタリト告_ル言渡_ラ為
ス可_キヤ否_ヲ裁判ス_ルヲ云_フ

第二百三十二條〇(千八百五十六年第七月十七

日)左ノ如ク改_ム重罪取調局ニテ被告_人重罪

ヲ犯_シタリト告_ク可_キ旨ヲ言渡_シタル時ハ

被告_人ニ對_シ召捕_ノ言渡書ヲ出_ス可_レス第百
二十

六條
見合

其言渡書ニハ、被告人ノ姓名、年齢、職業、住所、出
産ノ地ヲ記シ、且其罪犯ノ模様ト、其罪ニ管シ
タル刑法ノ箇條トヲ記ス可シ、若シ之ヲ記セ
サル時ハ、其言渡書ノ効ナカル可シ、

第二百三十三條〇(千八百五十六年第七月十七
日左ノ如ク改シ)被告人召捕ノ言渡書ハ、重罪
ヲ犯シタリト告ク可キ旨ノ言渡書中ニ記入
ス可シ、但シ其言渡書ニハ、重罪裁判所附ノ獄
舎ニ被告人ヲ送ル可キノ命令ヲ附記ス可シ、

第二百三十四條〇重罪取調局ノ言渡書ニハ、其
局ノ各裁判役之ニ姓名ヲ手署ス可シ、且其言
渡書ニハ、司ニステールピュブリックノ求刑ト
各裁判役ノ姓名トヲ附記ス可シ、若シ之ヲ附
記セサル時ハ、其言渡ノ効ナカル可シ、

第二百三十五條〇如何ナル事件ニ付テモ、重罪
取調局ニテ、被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可
キヤ否ヲ決定セサル間ハ、既ニ他ノ裁判役下
吟味ヲ為シ始メタルト否トヲ問ハス、其局ノ
公務ヲ以テ司ニステールピュブリックニ更ニ其

罪ヲ訴ヘシム可キ旨ヲ言渡シ証書類ヲ出サ
シメ其下吟味ヲ為シタル上ニテ相當人言渡
ヲ為スヲ得可シ

第二百三十六條○前條ノ場合ニ於テ第二百十

八條ニ記シタル局即チ重罪
取調局ノ裁判役一員下

吟味掛リ裁判役ノ職ヲ行フ可シ

第二百三十七條○其下吟味掛リ裁判役ハ自カ

ラ証人ノ申述ヲ聴キ又ハ証人住所ノ下等裁

判所ノ裁判役一員ヲシテ其申述ヲ聴カシメ

且被告人ヲ問ハシテ罪犯ニ付キ然テノ憑據

ヲ書面ヲ以テ記セシメ其時ノ模様ニ從テ引

出状又ハ禁錮状又ハ収監状ヲ出ス可キ

第二百三十八條○プロキュートルゼ子テシム下

吟味掛リ裁判役ヨリ証書類ヲ受取りタル時

ヨリ五日内ニ申立ヲ為ス可シ

第二百三十九條○千八百五十六年第七月十七

日左ノ如ク改シ吟味ノ上ニテ被告人ヲ重罪

裁判所ニ移ス可キ時ハ重罪取調局ニテ第ニ

百三十一条第二百三十二條第百三十三條

ヲ記スル如ク言渡ス可シ

又吟味ハ上、被告人ヲ輕罪裁判所ニ移ス可キ
時ハ、重罪取調局ニテ、第二百三十條ノ規則ニ
循フ可シ
此場合ニ於テ、既ニ被告人ヲ獄ニ繋キタル時
其罪禁錮以上ノ刑ニ處ス可キニ於テハ、裁判
言渡ニ至ル迄、被告人ヲ其囚獄ニ留メ置ク可
シ
第二百四十條ノ其他、此治罪法中ニテ前五條ニ
及セサル規則ハ、重罪取調局ニテ下吟味ヲ言
渡セタル場合ニ通シ用フ可シ

第二百四十一條ノ總テ被告人ヲ重罪裁判所ニ
移ス可キ時ハ、テロキユリユールゼ子ラル重罪告
訴狀記ス可シ
重罪告訴狀ニハ、左件ヲ記ス可シ

第一〇罪ノ種類

第二〇罪ヲ重クシ又ハ輕クス可キ所為及

總テノ模様

又此書ニハ、被告人ノ姓名、年齢、住所、職業、出產
ノ地等ヲ詳カニ記ス可シ
告訴狀ノ末ニ、其罪犯ヲ告訴スル旨ヲ簡畧ニ

記ス可シ但シ其文ハ左ノ如シ
右ニ因リ其何カノ殺害盜奪又ハ何カノ重
罪ヲ犯シタルトテ告訴ス但シ其罪犯ノ模
樣ハ云々知リ

第二百四十二條。被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス
言渡書及ヒ重罪告訴狀ハ其被告人ニ送達シ
此等ノ書面ノ寫ヲ被告人ニ渡シ置ク可シ

第二百四十三條。前條ニ記レタル書面ヲ送達
シタルヨリ二十四時内ニ被告人ノ裁判ヲ受
ル可キ裁判所重罪裁判所ニ設ケタル獄舎ニ其被
告人ヲ移ス可シ

第二百四十四條。若シ被告人ヲ召捕ユルヲ能
ハス又ハ被告人出席セサル時ハ此篇才四卷
才一章ニ記スル如ク抗傳人重罪被告者トシテ
處置ス可シ

第二百四十五條。プロキュールセザルハ被
告人ヲ重罪裁判所ニ移ス言渡書ヲ被告人住
所ノ地ノ知レタル時ハ其地ノ「メイト」ト犯罪
ノ地ヲ「メイト」ト送ル可シ

第二百四十六條。被告人重罪取調局ヨリ重罪

裁判所ニ至ルニ及ハサルノ言渡ヲ得タル時
ハ其事件ニ付キ重罪裁判所ニ引出サル、
ナカル可シ但シ其罪犯ニ付キ更ニ新ナル憑
拠アル時ハ格別ナリトス

第二百四十七條〇是レ迄重罪取調局ニ差出ス
トナクシテ新タニ差出シ且罪犯ノ証ヲ確的
ニ為シ又ハ事實ヲ見出スニ有益ナル証人ノ
申述書、証書、調書ハ罪犯ニ付テノ更ニ新ナル
憑拠ナリト看做ス可シ

第二百四十八條〇此場合ニ於テハ司法警察ノ

官吏又ハ下吟味掛リ裁判役新タニ得タル証
書類ノ寫ヲ遅延ナク上等裁判所ハ口キユル
ルゼ子テルニ送り重罪取調局ノ上席人
口キユルゼ子テルノ求メニ因リ口キユル
ルピエブリックノ申立ニテ法式ニ從ヒ更ニ下
吟味ヲ為ス可キ裁判役ヲ指示ス可シ
下吟味掛リ裁判役ハ新タニ罪犯ノ憑拠タル
記書類ヲ得タル上之ヲ口キユルゼ子テ
ルニ送ラサル内ニ才二百二十九條ニ循ヒ既
ニ赦宥シタル被告人ニ對シ禁錮状ヲ出ス

ヲ得可シ

第二百四十九條のフロキユリユルアムペリル

ハ、總テ、重罪犯、輕罪犯、誑誤罪犯ノ事件ヲ入

日毎ニフロキユリユルゼ子ラルニ報告ス可シ

第二百五十條のフロキユリユルゼ子ラルニ輕罪犯

又ハ誑誤罪犯ノ事件ノ報告ヲ得タル上ニテ

其事件更ニ重劇ナル模様アリト思フ時ハ其

報告ヲ受ケタルヨリ十五日内ニ其事件ニ付

テノ書類ヲ巴レニ受取り之ヲ受取りタルヨリ

更ニ十五日内ニ其相当ト思料スル所ヲ重罪

取調局ニ申立テ其局ニテ其申立ニ付キ三日

内ニ相當ノ言渡ヲ為ス可シ

第二章の重罪裁判所ヲ設ケル方法

第二百五十一條の上等裁判所ノ重罪取調局ヨ

リ重罪ヲ犯シタリト告クル被告人ニ裁判ス

ル為メ各判バルトマニ毎ニ重罪裁判所ヲ設

ク可シ

第二百五十二條の上等裁判所所在ノ判バルト

マニニ於テハ其裁判所ノ裁判役ニ眞出張シ

テ重罪裁判所ノ裁判役トナル可シ但シ其中

ハ一員上席人タル可シ
重罪裁判所ノ書記官ノ職務
ハ判ロキユリユールゼ子ラ此ノ代役之ヲ為ス可シ
判ロキユリユールゼ子ラ此ノ代役之ヲ為ス可シ
重罪裁判所ノ書記官ノ職務ハ上等裁判所ノ
書記官自カラ之ヲ行ヒ又ハ其補役ヲシテ之
ヲ行ハシム可シ

第二百五十三條ノ(千八百五十五年)第三月二十
一日左ノ如ク改メ上等裁判所ノアラサルコト
ハ判ロキユリユールゼ子ラ此ノ代役之ヲ為ス可シ

官員タル可シ
第一ノ別段任セラレタル上等裁判所ノ裁
判役一員但シ此裁判役ハ重罪裁判所ノ
上席人タル可シ

第二ノ上等裁判所ニテ其裁判所ノ裁判役
ヲ出張セシムルコトヲ適當ナリト思フ時
ハ其裁判役二員若シ然ラサル時ハ重罪
裁判所ヲ設ク可キ地ノ下等裁判所ノ上
席人又ハ裁判役二員

第三ノ下等裁判所ノ判ロキユリユールアムベ

リアル又ハ其代役一員但シ第百六十
五條第百七十一條第百八十四條ノ
規則ノ差支トナルトナカレ可シ
第四〇 下等裁判所ノ書記官又ハ其補役一
員

上等裁判所ノ上席人ハ先ツアロキユールセ
子ラレニ相談シタル上重罪裁判所ノ裁判役
トナル可キ下等裁判所ノ上席人又ハ裁判役
ヲ撰ム可シ〇其選挙ハ千八百十年第七月六
日ノ命令書ノ第七十九條及ヒ第八十條ニ記
シタル法式ト期限ト後ト之ヲ為シ且之ヲ
公ケニス可シ

會議已ニ開キタル
後ハ重罪裁判所
ノ上席代理人ヲ
撰ム可シ其未
會議ノ間カレ前
撰挙ノ權者ト上
等裁判所ノ上席
人ニ屬スルヲ要ス

重罪裁判所ノ會議ヲ開キタル後ハ其裁判所
ノ上席人正當ノ差支アリテ出席セサル裁判
役ノ代人ヲ撰ム又別段ノ道理アル時ハ裁判
役^其補役ヲ撰ム可シ
第百五十四條〇(千八百三十年第十二月十日
廢ス)

第百五十五條〇(全ト下流言堂ノ官署ノ其五
第百五十六條〇(全ト重罪裁判所ノ其五)

第二百五十七條の重罪取調局ニ在テ被告人重
罪ヲ犯シタリト告ク可キ言渡ニ管シタル上
等裁判所ノ裁判役ハ其事件ニ付キ重罪裁判
一所ノ上席人又ハ裁判役タル可カラス若シ其
裁判役重罪裁判所ノ上席人又ハ裁判役トナ
リ裁判ヲ言渡ス時ハ其言渡ノ効ナカル可シ
又下吟味掛リ裁判役ニ付テモ此條ノ規則ヲ
通シ用フ可シ

第二百五十八條の重罪裁判所ハ通常列バルト
マシノ首府ニ之ヲ設ク可シ
然レ凡上等裁判所ニテ更ニ他ノ地ニ之ヲ設
ク可キトヲ言渡スヲ得可シ

第二百五十九條の重罪裁判所ハ三月毎ニ其會
議ヲ開ク可シ
然レ凡事務繁タナル時ハ更ニ屢々其會議ヲ開
ク可シ

第二百六十條の重罪裁判所ノ會議ヲ開ク可キ
期日ハ其裁判所ノ上席人之ヲ定ム可シ
其會議ヲ開キタル上ハ既ニ吟味ヲ為シ得可
キ手續ニ至リシ總ニテノ重罪事件ヲ訴出
キ

千八百九十一年八月二十日
國會議員ノ議決ニ依リテ
裁判所ノ新入ノ任

トルゼ子ラレシ
ヨリ訴へ出ル
シタル後ニ非サレハ其會議ヲ
閉ツ可カラス

第二百六十一條の重罪裁判所會議ヲ開キタ
ル後ニ其裁判所附ノ獄舎ニ未^レ決^シ被告入ハ
刑ロキユリユールゼ子ラレヨリ別段求メラ^レ為^シ
且被告入承諾シタル上上席人ヨリ言渡ラ^レ為^シ
シタル時ニ非サレハ其會議ニテ直チニ其裁
判ヲ為ス可カラス

此場合ニ於テ刑ロキユリユールゼ子ラレ及ビ被
告人ハ重罪裁判所ニ訴ラ移ス重罪取調局ノ
言渡^リ即チ重罪ヲ犯^シ言渡^リ又取消サン下訴フル
事^ハ権ヲ抛棄シタルト看做不可^シ

第二百六十二條の重罪裁判所ノ裁判言渡ハ法
律上ニ定メタル所ニ循ヒ覆審院ニ上告スル
ニ非サレハ之ヲ取消サント訴フ可カラス
第二百六十三條の若レ第三百八十九條ニ記ス
ル如ク倍審ニ報告ヲ為シタル後重罪裁判所
ノ上席人其職務ヲ行フヲ能ハサルニ至ル時
ハ上等裁判所ヨリ出張シタル裁判役中ニテ
最モ先キニ職任ヲ得タル者之ニ代ル可シ又

上等裁判所ヨリ出張シタル裁判役ヲラサル
時ハ下等裁判所ノ上席人ニ代ル可シ

第二百六十四條〇若シ上等裁判所ヨリ出張
タル裁判役ニ差支アリ又ハ失踪ノ時ハ其上
等裁判所ノ裁判役之ニ代リ若シ其アラサル
時ハ下等裁判所ノ裁判役之ニ代ル可シ若シ
又下等裁判所ヨリ出張シタル裁判役ニ差支
アリ又ハ失踪ノ時ハ其補役之ニ代ル可シ
第二百六十五條〇プロキユリユールゼ子ラルハ綴
令其場ニ在ル時ト金氏其代役中ノ一員ニ其

職ヲ任カスルコトヲ得可シ
此條ノ規則ハ重罪裁判所ト上等裁判所トニ
通シ用フ可シ

第一款〇重罪裁判所上席人ノ職務

第二百六十六條〇重罪裁判所ノ上席人ハ左件
ヲ為ス可シ

第一〇被告人重罪裁判所附ノ獄舎ニ至ル
時其申述フル所ヲ聽ク事

第二〇陪審ヲ呼集メ之ヲ處列ニ為ス事
但シ其上席人ハ其職務ヲ裁判役中ノ一人ニ

任カスルヲ得可シ

第二百六十七條○重罪裁判所ノ上席人ハ陪審

其職務ヲ行フニ當リテ之ヲ指揮シ其高議ス

可キ事件ヲ并明シ又其職掌ニ注意セシメ終

テ吟味ノ時上席ヲ為シテ言ヲ発セント求ム

ル者ノ順序ヲ定ム可シ

其上席人ハ吟味ノ席ノ警察ヲ為スノ権アリ

第二百六十八條○又其上席人ハ事實ヲ見出ス

ニ有益ナリト思料ス可キ諸件ヲ為スノ特權

ヲ授カリ且本心ニ從ヒ事實ヲ見出スニ勉勵

ス可キヲ法律上ニ任セラレタル者トス

第二百六十九條○其上席人ハ吟味中証人ヲ呼

出シテ其申述ヲ聴キ若シ其証人出席セサル

時引出状ヲ出シ又吟味ノ席ニテ被告人又

ハ証人ノ申述フル所ニ從ヒ更ニ事實ヲ明瞭

ナラシム可キ証書類アリト思フ時ハ其証書

類ヲ差出サシムルヲ得可シ

此條ニ記スル如ク吟味中上席人ノ命ニテ呼

出サレタル証人ハ誓ヲ為スニ及ハス其申述

ハ唯事實ヲ知ルニ付テノ見合ノ為メナリト

有做ス可シ

第二百七十條○上席人ハ事實ヲ明瞭ナラシム

ルニ益ナク徒ラニ弁論ヲ示引カシム可シト

思フ所ノ事ヲ制止ス可シ

第二款○上等裁判所ハ

セ子ラルル職務

第二百七十一條○上等裁判所ハ

セ子ラルル此卷第一章ニ定メタル法或ニ循

第ニ重罪取調局ヨリ重罪ヲ犯シタルト告ケル

被告人ヲ自カラ重罪裁判所ニ訴ヘ又ハ其代

役ヲシテ訴ヘシム可シ

ラシハ重罪取調局ヨリ重罪ヲ犯シタルト告ケ

タル以外ノ者ハ重罪裁判所ニ訴フ可カラズ

若シ之ヲ訴ヘタル時ハ其訴ヲ取消シ又別段

ノ道理アル時ハ損失ノ償ヲ為ス可キノ訴ヲ

受ク可シ

第二百七十二條○

其代役証書類ヲ受取りタル時ハ直ニ吟味ノ

為メ預備ノ書類ヲ託シ且重罪裁判所ノ會議

ヲ開ク時ニ當リ双方ノ辯論ヲ為シ始メ得可

キ換様ニ至ラシム可キトニ注意ス可シ
第二百七十三條〇「プロキユールゼ子ラレハ辨
論ノ席ニ出テ被告スヲ刑ニ處スルヲ求メ
又重罪裁判所ヨリ裁判言渡ツ為ス時立會フ
可シ

〇第二百七十四條〇「プロキユールゼ子ラレハ自
己ノ職務ニ因リ又ハ裁判事務執政ノ命ニ因
リ、コフロキユールアムニリアルニ其知ル所ノ
罪犯ヲ訴フ可キヲ任ス可シ、第ニ合
第二百七十五條〇「プロキユールゼ子ラレハ上

〇 第 等裁判所又ハ官吏ヨリ差送り、又ハ平民ヨリ
直々ニ己ニ差出シタル罪犯申立書ヲ受取り、
之ヲ簿冊ニ記シテ、其申立書ヲ「プロキユール
アム」ニ送達ス可シ

△ 第 第二百七十六條〇「プロキユールゼ子ラレハ法
律上ニテ權ヲ授リタル名義ヲ以テ、其相當ト
思料スル所ヲ裁判所ニ求ムル書面ヲ出シ、裁
判所ニテハ其書面ヲ受取りタル証書ヲ渡シ
テ、其書面ノ趣ヲ高議ス可シ
第 第二百七十七條〇「プロキユールゼ子ラレハ前

條ニ記スル書面ニ姓名ヲ手署シ又并論中其
求ムル所ハ書記官之ヲ調書ニ記シテ口キリユ
ルルゼ子ラレ之ニ姓名ヲ手署ス可シ○口
キリユルルゼ子ラレ求ムル所ヲ裁決スル言
渡書ハ上席人ト書記官ト之ニ姓名ヲ手署ス
可シ

第百七十八條○裁判所ニテ口キリユルルゼ
子ラレノ求ムル所ヲ聞届スト雖其儘ニテ
吟味及ヒ裁判ノ手續ニ取掛ル可シ但シ別段
ノ道理アル時ハ裁判言渡アリシ後口キリユ

ルルゼ子ラレ覆審院ニ上告スルヲ得可シ

○ 第二百七十九條○總テ司法警察ノ官吏及ヒ下
吟味掛リ裁判役ハ口キリユルルゼ子ラレノ
監督ヲ受ク可シ

第九條ニ記スル所ニ循ヒ其當然ノ職掌行政
ノ事ニ管スルト雖モ法律上ニテ司法警察ノ
任ヲ受ケタル官吏ハ其警察ノ職務ニ付キテ
口キリユルルゼ子ラレノ監督ヲ受ク可シ

○ 第二百八十條○司法警察ノ官吏及ヒ下吟味掛
リ裁判役其職務ヲ怠ルトアル時ハ口キリユ

ルセ子ラルヨリ之ヲ戒ム可シ但シ「プロキ
リルセ子ラルハ其戒ヲ為シタル旨ヲ別段
設ケタル簿冊ニ登記ス可シ

第二百八十一條○司法警察ノ官吏及ヒ下吟味
掛リ裁判役再ヒ其職務ヲ怠ル時ハ「プロキユ
ルセ子ラル之ヲ裁判所ニ申立ツ可シ
「プロキユルセ子ラルハ裁判所ノ允許ヲ得
タル上ニテ此等ノ官吏ヲ裁判役會議ノ室ニ
呼出ス「ヲ得可シ

然ル上ニテ裁判所ヨリ此等ノ官吏ニ向後更
ニ其職ニ勉勵ス可キ「ヲ嚴重ニ命令シ且「
「プロキユルセ子ラルニ其呼出ヲ允許セシ言
渡書ヲ寫シタル費用及ヒ其寫ヲ送達シタル
費用並ニ其呼出シノ費用ヲ此等ノ官吏ヨリ
償ハシム可シ

○第二百八十二條○前ニ記シタル官吏「プロキユル
「ルセ子ラルノ戒ヲ為シタル旨ヲ簿冊ニ登
記シタル日ヨリ一年內ニ更ニ其職ヲ怠リタ
ル時ハ再ヒ怠職シタルノ罪アリトス
第二百八十三條○「プロキユルセ子ラル

及ヒ上席人司法警察、官吏又ハ下吟味掛リ
裁判役ノ職務ヲ行フ可キ權アル場合ニ於テ
ハ其ノロキユリエトルアムペリアル及ヒ上席人
犯罪ノ地ノアルロシゲスマン又ハ犯罪ノ地
ニ隣スルアルロシゲスマンノロキユリエトル
アムペリアル又ハ下吟味掛リ裁判役又ハ治
安裁判役ニ其職務ヲ任カスルヲ得可シ但
シ被告人ニ對シ引出狀禁錮狀收監狀ヲ出ス
ノ權ハ之ヲ任カス可カラス

第三款ノ重罪裁判所ノロキユリエトル

第二百八十五條ノ職務

第二百八十四條ノ第二百五十三條ニ記スル如
ク、上等裁判所ノアラサル判バルトマンニ於
テハ、何ロキユリエトルアムペリアル重罪裁判所
ニ於テ何ロキユリエトルゼ子ラルニ準シキ職務
ヲ行フ可シ但シ此場合ニ於テモ、何ロキユリエ
トルゼ子ラルハ其職務ヲ行フ為メ、何時ニテモ
重罪裁判所ニ出席スルヲ得可シ

第二百八十五條ノ何ロキユリエトルゼ子ラル代
役ハ其判バルトマンノ首府ニ任ス可シ、此條
ハ判

ニ廢スルノ命令ナシト雖モ
既ニ無用トナリシモノナリ

第二百八十六條○刑ハルトマニシテ首府ニ非サ

ル地ニ重罪裁判所ヲ設ケル時ハ
刑口キユリト

ルセ子テ此ノ代役其地ニ移住ス可シ
前條ニ

既ニ無用ノ
箇條ナリ

第二百八十七條○重罪裁判所ノ刑口キユリト

アムペリアルハ輕罪裁判所ノ言渡ノ控訴ヲ

吟味シ及ヒ裁判スル時
司ニステイルセユブサ

此ノ職ヲ行フ可シ
第百ニ

第二百八十八條○其刑口キユリト
アムペリア

止ニ一時差支アル時ハ
其テハルトマニシノ首

府ノ下等裁判所ノ刑口キユリト
アムペリア

止之ニ代ル可シ
當時ハ
行ハル
間ノ
文無用ニ
於テ

ハ其代役之ニ代ル
可シト改ム可シ

第二百八十九條○重罪裁判所ノ刑口キユリト

アムペリアルハ其テハルトマニシ中ノ司法警官

察官吏ヲ監督ス可シ

第二百九十條○其刑口キユリト
アムペリアルハ

ハ其テハルトマニシ内ニテ吟味シタル重罪輕

罪註誤ノ目錄ヲ三月毎ニ
刑口キユリトセ子

